

エリア 51—世界でもっとも有名な秘密基地の真実

原 注

プロローグ 秘密都市

- p. 7 **ネリス試験訓練場**…Map reference number NTTR01, NGA stock no. 84413
ネヴァダ核実験場…Map based on NTS Boundary Coordinates: FFACO, appendix 1, January 1998, revision 2, 6. ネヴァダ核実験場は2010年8月23日にネヴァダ国家安全保障サイト (NNSS) に改称されたが、本書でもネヴァダ核実験場と呼んでいる（なぜなら60年近く、そう呼ばれてきたからだ）。
- p. 8 **一〇五発の原爆**…Department of Energy, “United States Nuclear Tests,” xii-xv. 公式には、ネヴァダ核実験場の地上で炸裂した爆弾の数は100発で、ネリス空軍区域内で炸裂した爆弾の数は5発、ネヴァダ核実験場の地下で炸裂した数は828発（そのうち24発はイギリスとの共同実験）で、合計933発となっている。
兵器級のプルトニウムとウラン…国家核安全保障庁のスポークスマンであるダーウィン・モーガンは明言している。「ネヴァダ核実験場が兵器級のプルトニウムとウランの保管施設だったことはないが、当然のことながら、地下で炸裂した828発の核爆弾の“残存” 放射性物質は今も存在している」（2010年9月21日のEメールより）
- p. 9 **ふたつのプロジェクト**…ピーター・メルリンに取材。Memo, Top Secret Oxcart, Oxcart Reconnaissance Operation Plan, BYE 2369-67, 15.
- p. 10 **原爆一個の値段**…Brookings Institute, “50 Facts about U.S. Nuclear Weapons,” fact no. 1 (1996 dollars: \$20,000,000,000; 2011 dollars: \$28,000,000,000).
ふたりの人物…Wiesner, *Vannevar Bush*, 98. この事実はほとんど知られていない。ヴァネヴァー・ブッシュの伝記の著者である米国科学アカデミーのウィズナー（アイゼンハワー大統領の科学顧問でもあった）はこう書いている。「ローズヴェルト大統領の死後、トルーマン大統領に核兵器に関する詳細な情報を最初に伝える役目は、ブッシュが担った」
マンハッタン計画の存在を知る者は誰もいなかった…Wills, *Bomb Power*, 10-13. 当時副大統領だったトルーマンが疑念を抱き、陸軍長官のヘンリー・L・スティムソンに詰め寄ったときのいきさつについてウィズナーは詳しく書いている。ウィズナーによれば、トルーマンはスティムソンに引っ込んでいるようにと言われ、結局、言われたとおりにしたということだ。
- p. 11 **想像を絶する破壊力**…Smyth, *Atomic Energy for Military Purposes*, 13. 7. Also known as *The Smyth Report*. これは広島に原爆が投下されてから6日後（1945年8月12日）にアメリカ政府が公開した報告書であり、そこにはマンハッタン計画の行政面と技術面の歴史が詳しく書かれている。国民に原子力に関する十分な情報を提供することによって、次に何をすべきかという公開討論に誰もが参加できるようにする、というのがこの報告書の目的であり、さらに、核爆弾を軍ではなく民間の支配下においたほうがより民主的だという考えも推奨されている。しかし蓋を開けてみれば、原子力委員会による支配のほうが軍による支配よりもさらに非民主的なものだった。Hewlett and Anderson, *New World*.
情報が情報として形を成した時点から機密区分に入れる…Quist, *Security Classification*, 1. クイストは書いている。「1946年制定の原子力法は、情報の拡散を制限するプログラムをつくったアメリカ初の（かつ唯一の）法律である。原子力法によって、それまでは軍の支配下にあった原子力が5人のメンバーからなる民間機関

(すなわち原子力委員会)の手に委ねられることになった。原子力法を制定するにあたって議会は、マンハッタン計画で用いられた規制(核爆弾や原子力に関する情報を包括的かつ厳格に規制する方法)を継続させた。原子力法は、原子力に関する情報は、“部外秘データ”として保護しなければならないと定めており、さらに“部外秘データ”の定義も規定している」

七万発の原爆…Brookings Institute, “50 Facts about U. S. Nuclear Weapons” fact no. 6.

中核的存在…このことは、本書における大前提のひとつであるが、原子力委員会はまちがいなく異議を唱えることだろう(しかしそれも、本書のなかで私が触れているプロジェクトの機密解除を余儀なくされる日が来るまでのことだ)。

クリントン大統領…放射線被曝実験諮問委員会は1994年1月15日にクリントン大統領によって設立された委員会で、その目的は、連邦政府が出資する研究の実験対象として人体が用いられていたという事実を調査し、公表するというものだった。大統領令によって設立され、連邦諮問委員会法の下にあるこの諮問委員会は、その活動内容や文書を一般市民に公開しなければならないという義務を負っており、それらの情報の一部は以下のウェブサイトで見ることができる。

<http://www.gwu.edu/~nsarchiv/radiation/>.

p. 12 **大統領には「知る必要がない」**…EG&Gのエンジニアとの著者インタビュー。

絶対的な権限…Quist, *Security Classification*, 24; Schwartz, *Atomic Audit*, 442-51.

最も規模の大きな施設…Written correspondence with Darwin Morgan, September 21, 2010, U. S. Department of Energy, Nevada Operations Office, Office of Public Affairs and Information.

国防総省に管理されていない…エリア51でおこなわれた最初のプログラムの運営に国防総省が関与していたかどうかは今のところ定かではない。しかし、国立公文書記録管理局の調査により、国防総省は一般に知られているよりも深く、ペーパークリップ作戦に関わっていたことが明らかになっている。たとえば、私が情報公開法に基づいて入手した文書には「1950年代初め、国防総省と統合諜報対象局がペーパークリップ作戦を監督した」と書かれている。統合諜報対象局というのは統合参謀本部の管理下にある機関で、このことからわかるように、さまざまな機関と複雑な命令系統によって情報は隠されてきたのである。

第1章 エリア51の謎

イェルク・アルヌ、ジョージ・ナップ、ソントン・“T・D”・バーンズ、ヒュー・スレーター大佐、リチャード・ミンガス、アーネスト・ウィリアムズ、アルバート・ウィーロン博士、ケネス・コリンズ、サム・ピッツ、早川彌生、スタントン・フリードマンに取材。

p. 15 **日が暮れるまで待つ**…イェルク・アルヌに取材。

p. 16 **〈アイウィットネス・ニュース〉に登場**…ジョージ・ナップに取材。“Bob Lazar: The Man Behind Area 51,” Eyewitness News Investigates, <http://area51.eyewitnessnews8.com/>.

p. 17 **暗黙の了解**…取材したエリア51の職員(とりわけ空軍の下士官兵)が口々に言っていたことばは「レヴンワースの脅威」だった。すなわち、カンザス州レヴンワースにあるアメリカ最大の連邦刑務所に投獄されるという暗黙の了解があった、ということだ。

エドワード・テラー博士…2003年に95歳で死去するまで、テラーはラザーがエリア51で働いていたという事実を肯定も否定もしていない。

テラーの講演…テラーの講演のテーマは「スリーマイル島原子力発電所事故後の世界における核凍結運動について」だった。

第1面…*Los Alamos Monitor*, June 27, 1982, identifies Lazar as “a physicist at the Los Alamos Meson Physics Facility.”

- p. 18 **最終的な結末**…ラザーについての詳しい情報は、エリア51に関するウェブサイト (Dreamlandresort.com) で入手することができる。そのなかの「ボブ・ラザー・コーナー」には、ラザーについての年代表、公開文書や手紙、さらにはラザーに関する批評家や友人のコメントが掲載されている（それらはすべて、私もインタビューしたトム・マフードの調査による）。

トレシー・マーク…結婚証明書より（トム・マフードの調査）。トレシー・アン・マークとラザーは1986年10月12日に2度目の結婚をしており（最初の結婚は1986年4月19日）、その際にマークはなぜかジャッキー・ダイアン・エヴァンズという名前を使っていた（マフードの調査より）。

一酸化炭素中毒死…*Ibid.* Death certificate #001423-86, Clark County Health District, Las Vegas, NV; cause of death: “inhalation of motor vehicle exhaust.” Sourced by Tom Mahood.

- p. 19 **エリア51へと飛んだ**…取材調査による。
p. 20 **〈レイセオン社〉によって設計された**…T・D・バーンズに取材。
p. 21 **誓いを生涯守り抜き**…スレーター大佐に取材。
ゲート三八五…リチャード・ミンガスに取材。
p. 22 **原子力委員会のトラック**…アーニー・ウィリアムズに取材。ウィリアムズはネブラスカ州の農場出身で、彼の父は「地下水脈を発見する人」だった。ウィリアムズも父のその能力を受け継いでおり、エリア51で最初の井戸を掘る際にも、彼の能力が生かされた。

ハズマット防護服…R. Kinnison and R. Gilbert, “Estimates of Soil Removal for Cleanup of Transuranics at NAEG Offsite Safety Shot Sites,” FY 1981, 1984, 1986-91.

セキュリティを通過したあと…ジャネット航空で働いていた匿名のEG&G職員に取材。

- p. 23 **真夜中のテニス**…アルバート・ウィーロン博士に取材。

プール…ケネス・コリンズに取材。

サムズ・プレイス…サム・ピッツに取材。

- p. 24 **ラザーによれば**…ジョージ・ナップによるラザーへのインタビューはYouTubeで見ることができる。

小さな窓を通して…ジョージ・ナップによるラザーへのインタビューはYouTubeで見ることができる。4:10-5:05. Knapp. 「以前のインタビューであなたは、エイリアンらしきものを見たとおっしゃっていましたが、ほんとうにエイリアンだったのですか？ あなたはいったい何を見たのですか？」（ラザー）「私はドアの脇を歩いていて、ドアには23センチ×23センチの窓があって、そこから部屋のなかがちらっと見えた。なかには男がふたりいて、何かを見下ろしていた。その何かは私の眼をとらえはしたが、それがなんなのか、はっきりとは見えなかった。大勢の人間がここにはエイリアンがいると断言していた。エイリアンが働いているってね。それで、私の頭が勝手に想像をふくらませたのかもしれない。だから私としては、あれがエイリアンだったと断言するつもりはないよ」以下を参照。

<http://www.youtube.com/watch?v=XAfVZcAsTxk>.

- p. 25 **エイリアンかもしれないもの**…ジョージ・ナップによるラザーへのインタビュー。
2:33-3:30. 研究対象として彼にあてがわれたUF0について、ラザーはこう言われたそう
うだ。それは地球外の惑星からやってきたものだ、と。そして、そのUF0のパイロッ
トであるエイリアンの解剖写真を見せられたという。(以下、インタビューより)「上
半身を写した小さな写真を数枚見せられたが、そこにはエイリアンの頭と肩と胸が写
っていた。胸はT字に切開されていて、臓器がひとつ取り除かれていた。臓器自体は
別の写真に写っていたが、細かく解剖されていて、人間の心臓とは明らかに構造がち
がっていた。写真に写っているエイリアンはUF0話の中に出てくる典型的なエイリア
ンにそっくりだった。身長は不明だけど、想像するにおそらく、1メートルか1.2メー
トルくらいじゃないかと思う」
以下を参照。 <http://www.youtube.com/watch?v=XAfVZcAsTxk&feature=related>.
グルーム湖の背後の山にはいり…以下を参照。Tom Mahood, “The Robert Lazar
Timeline, as assembled from Public Records and Statements,” July 1994, updated
July 1997, from dreamlandresort.com. ラザーはさまざまな友人とともに合計3回、グ
ルーム湖の背後の山に行っており、警備員に見つかったのは、3度目のツアーのとき
だった。
- p. 26 **妻の電話の会話記録**…Ibid.
早川彌生…早川彌生に取材。
- p. 27 **ボディガード**…ナップによるインタビューのなかでラザーは、フリーウェイを走行中
に撃たれたこと、インディアン・スプリングスでの取り調べ中に銃を突きつけられた
ことについて語っている。YouTube interview five of six, minute 6:00 (ibid., minute
8:00).
- p. 29 **嘘発見器**…WSVN-7のニュースレポーター、ダン・ハウズルが元政治家テリー・カヴェ
ルネティにおこなったインタビュー (YouTube) より。「UF0の話に関して、ボブ・ラ
ザーは嘘発見器に合格した」
スタントン・フリードマン…スタントン・フリードマンに取材。核物理学者として働
いた14年間のあいだに、フリードマンはゼネラルモーターズやゼネラルエレクトリッ
クやウェスティングハウスといった企業で最先端の研究に携わった。UF0に関する論
文を80以上発表しているほか、6冊の本を執筆、さらには数多くのUF0関連のドキュメ
ンタリー番組に出演している。
- p. 30 **ロズウェル事件の詳細を暴露**…*Recollections of Roswell, Testimony from 27
Witnesses Connected with Recovery of 2 Crashed Flying Saucers in New Mexico in
July 1947*, DVD, 105 minutes.
- p. 32 **ロズウェル事件**…Berlitz and Moore, *Roswell Incident*. 著者のひとりを自分ではな
くベルリッツにしたのは、みんなで決めたことだった、とフリードマンは語っている。
あの〈ベルリッツ語学学校〉のベルリッツ家の出で、著名な言語学者でもある彼を著
者にしたほうが、物議をかもすようなテーマの本を出版社にうまく売り込むことがで
きると考えたからだという。チャールズ・ベルリッツは25カ国語を話し、20世紀の最
も重要な言語学者としてしばしばその名があがる。彼が1974年に出版した『バミュー
ダ・トライアングル』は1000万部のベストセラーになった。

第2章 架空の宇宙戦争

リチャード・S・レグホーン大佐、ラルフ・“ジム”・フリードマン、アルフレッド・“アル”・
オドネル、ハーヴィ・ストックマン、スレーター大佐、デヴィッド・マイラに取材。

- p. 35 **火星人がほんとうに地球に**…*Trenton Evening Times*, October 31, 1938. ラジオドラマ〈宇宙戦争〉に関する資料は、以下のサイトで閲覧できる。
<http://www.war-of-the-worlds.co.uk/documents.htm>.
- p. 36 **電話回線が通信不能に陥り**…*Ibid.*, “Log from Jersey Police, Port Norris Station.”
- p. 37 **連邦通信委員会の役目**…Associated Press, “Mars Monsters Broadcast Will Not Be Repeated. Perpetrators of the Innovation Regret Causing of Public Alarm,” November 1, 1938.
- p. 38 **アドルフ・ヒトラーもまたその事実に注目した**…*Hand, Terror on the Air!* 7.
ヨシフ・スターリンも注目していた…EG&Gのエンジニアへの著者インタビュー。
ヴァネヴァー・ブッシュもまた…Correspondence between Vannevar Bush and W. C. Forbes, June 8, 1939; Vannevar Bush, A Register of His Papers in the Library of Congress, Manuscript Division, Library of Congress, Washington, DC.
- p. 39 **本物のフランケンシュタイン**…Winthrop, “Science Discovers.”
〈宇宙戦争〉を引き合いに…Zachary, *Endless Frontier*, 190.
- p. 40 **ローズヴェルト大統領が**…“Vannevar Bush, A Collection of His Papers in the Library of Congress,” Manuscript Division, Library of Congress, Washington DC.
ブッシュの次の一手…Zachary, *Endless Frontier*, 285. 原爆の誕生に重要な役割を果たしたことで、ブッシュの評判は高まった。日本が降伏すると、おおかたのアメリカ人はトルーマンと同じく歓喜し、マンハッタン計画のリーダーを尋問するのではなくむしろ彼らに拍手を送ったのである。科学者としての先見の明と大規模な事業をまとめ上げる手腕の持ち主としてのブッシュの名声は確固たるものになった。ブッシュにとって原爆は、5年前はほとんど無名だった彼がまぎれもない著名人になるための最後の仕上げのようなものだった。
- p. 41 **アメリカが平和を祝福していた頃**…“Majority Supports Use of Atomic Bomb on Japan in WWII”: David Moore, Gallup News Service, August 5, 2005.
クロスロード作戦は終戦から一年も経たないうちに…レグホーン大佐に取材。大佐はクロスロード作戦での歴史的な仕事について大変詳しく話し、また1946年の核実験の様子を上空から撮影した貴重な写真も貸してくれた。同様に借りた2冊の年鑑のような本を読むと、クロスロード作戦には1万個以上の機材と途方もない数の（全世界のフィルム供給量の半分近くにもおよぶ）フィルムが使われたことがわかる。空軍だけで実に900万枚もの写真を撮ったのである。
バラクーダ…ラルフ・“ジム”・フリードマンに取材。フリードマンが初めてビキニ環礁を訪れたのはブラヴォー実験と呼ばれる核実験の際で、クロスロード作戦からは6年が経過していたが、バラクーダの問題は依然同じだったという。
ジュダ…Bradley, *No Place to Hide*, 158.
- p. 42 **ロングリック環礁に避難**…ロバート・ストーン監督のドキュメンタリー映画 *Radio Bikini* (1987) のなかには、原住民にプロパガンダを効果的に伝えようと、練習に励む軍人の姿を写したシーンがある（そのシーンは原子力委員会の記録映像からの削除部分である）。
三回の核実験…Schwartz, *Atomic Audit*, 102. 終戦から11カ月後の1946年におこなわれたクロスロード作戦には13億円という、その後おこなわれたどの核実験よりも多額の資金が投入され、95隻もの艦船が使われた。さらに、この作戦に参加した軍人（および民間人）の数は42000人にもおよんだ。まさに、力の誇示のためにおこなわれた作戦だったと言える。
オドネルという青年…アルフレッド・“アル”・オドネルに取材。

- p. 44 **すさまじい対空砲火**…Air Force Historical Research Agency, 30 Reconnaissance Squadron (ACC), Lineage, Assignments, Stations, and Honors, Major Richard S. Leghorn, <http://www.afhra.af.mil/factsheets/factsheet.asp?id=10193>.
- p. 45 **めったに笑わない男**…Kozak, *LeMay*, iv.
- p. 46 **一羽五セント**…Ibid., 9.
ジェット爆撃機に乗った原始人…I. F. Stone, *The Best of I. F. Stone*, 326–28.
ビキニ環礁にいるのはそのため…Rhodes, *Dark Sun*, 261–62.
一大イベント…〈ニューヨーク・タイムズ〉はこの作戦を「歴史上類を見ないほど途方もない実験」と呼び、ハフマン上院議員は「太平洋上の“ローマ人の休日”」（訳注：古代ローマ人が奴隷を猛獣と戦わせて愉しんだことから、野蛮さを特徴とする公衆の面前での見世物の意）と呼んだ。彼はまた「この実験が世界に与える印象は、アメリカはこれから戦争をするつもりだということだけだ」と断言した。〈南部ヤギ酪農協会〉は、実験対象にはヤギではなく下院議員を使うべきだと主張し（いいヤギというのはいい下院議員よりも見つけるのが難しいというのがその理由だった）、ホワイトハウスのまえにはクロスロード作戦に反対する人々が押し寄せた。デモ隊の掲げるプラカードにはこう書かれていた。「ビキニ：第3次世界大戦のリハーサル」
一〇〇万トン…Fact sheet, Operation Crossroads, Defense Nuclear Agency, Public Affairs Office, Washington, DC, April 5, 1984.
アルフレッド・オドネルがいた…アルフレッド・オドネルに取材。
- p. 47 **DN-11リレーシステム**…アルフレッド・オドネルに取材。オドネルが保管していたハーバート・グリアの手書きの手紙を参考にした。
- p. 48 **背すじの凍るような光景**…レグホーン大佐に取材。
- p. 49 **バスタブに浮かんだおもちゃのように**…United States Atomic Energy Commission Memorandum for the Board, August 23, 1973, #718922, Naval Vessels Sunk During Operation Crossroads; AEC film footage of the explosion, Atomic Testing Museum library, Las Vegas, NV.
- p. 50 **ヴォルガ川の西側**…レグホーン大佐に取材。Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 22.
造船所やミサイル発射施設…Ibid. ハーヴィ・ストックマンに取材。
- p. 52 **地球の反対側**…Rhodes, *Dark Sun*, 261.
- p. 53 **核分裂連鎖反応**…O’Keefe, *Nuclear Hostages*, 134.
別の秘密兵器…EG&Gのエンジニアへの著者インタビュー。
秘密兵器「ヘルメス」…ホワイトサンズ・ミサイル実験場のアメリカ陸軍広報官リサ・ブレヴィンズに取材。“Report on Hermes Missile Project,” Washington National Records Center, Record Group 156.
ヒトラーの所有物…Hunt, *Secret Agenda*, 27.
- p. 54 **ペーパークリップ作戦**…今もその詳細のほとんどが機密のままになっているペーパークリップ作戦は終戦前に開始された（当初はプロジェクト・オーヴァーキャストまたはプロジェクト・パジャマと呼ばれた）。その主な目的は、冷戦に関するアメリカの研究プロジェクトにドイツ人科学者の頭脳を利用し、それと同時に、ドイツ人科学者がソ連側の手に渡ることを阻止する、というものだった。少なくとも1600人のドイツ人科学者がさまざまな諜報機関によって選び出され、アメリカに連れてこられたと考えられている。ペーパークリップ作戦には後継のプロジェクトがいくつもあるが、それらのプロジェクトに関しては2011年現在も機密のままである。
ヴェルナー・フォン・ブラウン…G-2 Paperclip “Top Secret” files, WNRC Record Group 330. Also from FBI dossier “Wernher Magnus Maximilian Von Braun, aka

Freiherr Von Braun,” file 116-13038, 297 pages; also see Neufeld, *Von Braun*.

エルンスト・シュタインホフ博士…G-2 Paperclip “Top Secret” files, WNRC, Record Group 319.

- p. 55 **ホワイトサンズ性能試験場**…Schwartz, *Atomic Audit*, 169. 現在はホワイトサンズ・ミサイル実験場と呼ばれているこの施設は、アメリカ最大の軍事施設である（その広さはデラウェア州とロードアイランド州を足したものに相当）。人類初の核実験であるトリニティ実験はこの施設の最北端でおこなわれた。

シュタインホフ博士は何も言わなかった…Hunt, *Secret Agenda*, 27; Neufeld, *Von Braun*, 239.

市民を恐怖に陥れ…“V-2 Rocket, Off Course, Falls Near Juarez,” *El Paso Times*, May 30, 1947.

- p. 56 **妨害工作**…Army Intelligence, G-2 Paperclip, Memorandum for the AC of S G-2, Intelligence Summary, Captain Paul R. Lutjens, June 6, 1947, RG 319, Washington National Records Center (WNRC), Suitland, Maryland. Hunt, *Secret Agenda*, chapter 3; Major Lyman G. White, “Paperclip Project, Ft. Bliss, Texas and Adjacent Areas,” MID 918.3, November 26, 1947.

無駄骨以外の何物でもない…1948年の3月、国務省に宛てた手紙のなかで、当時統合諜報対象局の局長だったボスケット・ウェブはこう書いている。「関係者のなかには、共産主義というより大きな脅威が世界全体を脅かそうとしている今となつては、ドイツ人科学者がナチ党员だったかどうかはもはや深刻な問題にはならないという意見を表明している者がいるが、私自身、その意見に強く共感するものである。ドイツ人科学者の過去のおこないばかりこだわって、その詳細を調べるのは、“無駄骨以外の何物でもない”と彼らは言っているが、まことに適切な表現であると言える」

- p. 58 **それらがなぜ並はずれていたのか**…EG&Gのエンジニアに取材。

戦闘機でその未確認飛行物体を探し…1963年から1968年にかけてエリア51の司令官を務めたスレーター大佐に取材。チャンドラーの個人的な友人だったスレーター大佐は、事故後何十年も経ってから、チャンドラー本人からこの出来事について知らされた。

- p. 59 **回収された飛行物体**…EG&Gのエンジニアに取材。

キリル文字…EG&Gのエンジニアに取材。

アラスカ国境近く…EG&Gのエンジニアに取材。

- p. 60 **原子力だったら？**…EG&Gのエンジニアに取材。

アメリカ爆撃機…Myhra, *The Horten Brothers and Their All-Wing Aircraft*, 217-20. デヴィッド・ミラに取材。1980年代、ミラはホルテン兄弟のふたりに合計何百時間にもおよぶインタビューをおこなった（ヴァルターへのインタビューはドイツで、ライマールへのインタビューはアルゼンチンでおこなわれた）。

- p. 61 **ペーパークリップ作戦の科学者**…EG&Gのエンジニアへのインタビューに基づいた著者の推測である。間接的な情報を持つ複数の人物の話によると、このプロジェクトに配属されたペーパークリップの科学者のなかには、フォン・ブラウンとエルンスト・シュタインホフに加えてウベルトウス・シュトルークホルト医学博士もいたということだ。かつてのナチ党员で、1947年にはテキサス州サンアントニオにあるランドルフ空軍基地の航空医学研究所で実験に携わっていたシュトルークホルト博士は、第三帝国ではドイツ空軍（ルフトヴァッフェ）の航空医学の責任者として働いていた（高度における人体反応に関する研究の第一人者だった）。シュトルークホルトに関しての詳しい情報は以下を参照。Bower, *Paperclip Conspiracy*, 214-323.

こっそりと運び去られた…EG&Gのエンジニアに取材。

ハラス作戦…Jacobsen, U. S. Army Intelligence and Security Command (INSCOM) FOIA request, “Horten Brothers and Operation Harass.” The file was declassified by INSCOM beginning on July 6, 1994, CDR USAINSCOM F01/P0 Auth para 1-603 DOD 5200.1R, 358 pages. Notes for pages 38 through 62 refer to this record group.

- p. 62 **ペーパークリップ作戦の科学者から**…Headquarters, Counter Intelligence Corps Region I, 970th Counter Intelligence Corps, Detachment European Command, APO-154, January 6, 1948, 92. ホルテン兄弟の手がけた仕事に関して詳しく知っている科学者のひとりとしてはリピッシュがあげられる。リピッシュ博士は上司のエルンスト・シュタインホフやリングレブ博士とともにオーストリアのウィーン航空研究所（高速飛行を研究するドイツの研究施設）から〈ライト・フィールド〉へ連れてこられた。

マンハントが始まる…オハイオ州〈ライト・フィールド〉の空軍資材コマンドは「空飛ぶ円盤」と呼ばれる飛行物体の外見や機能に関する重要な資料を収集しており、その報告書には、空飛ぶ円盤のような飛行物体は実在する、と書かれている。現在は飛行物体の風洞試験用のモデルを製造中とのことである。しかし、これは明らかに最初の覚書ではない。1948年1月2日の覚書には以前の手紙（1947年10月28日の日付のついた手紙）に触れた部分があり、そこにはこう書かれている。「RE: ホルテン兄弟（空飛ぶ円盤の件）」 “RE: HORTEN Brothers, SUBJECT: Flying Saucers, dated 28, October 1947.”

ふたりの重要性は見落とされていた…デヴィッド・ミラに取材。

最新型のホルテン… “HORTEN, Walter-” LKL: A. V. V. Gottingen (14-5-46) “Expert on ‘flying-wing’ aircraft, including HOVIII IX & X,” 155 (note there are two separate pages numbered 155).

- p. 63 **ティモシー・クーパー**…空飛ぶ円盤に関する覚書を読めば、ロズウェルでの墜落事故の直後に軍が探しはじめたのは宇宙人のつくった航空機に関する情報ではなく、ドイツ人科学者のつくった航空機に関する情報だったことがわかる（実際、その覚書を読めば、空飛ぶ円盤というのはドイツ人の設計したソ連製の乗りものだということを統合参謀本部がすでに知っていたことがわかる）。しかし、UFO研究家の多くは、そのような覚書は軍情報部がでっちあげたものにちがいないと考えた。

きわめてすぐれた操作性…Air Intelligence [illegible] for alleged “Flying Saucer Type Air Craft,” 152-56.

- p. 64 **〈ライト・フィールド〉にいるペーパークリップの科学者**…Headquarters Sub Region Frankfurt, Counter Intelligence Corps Region III, APO 757, 4 February 1948, 71-72. ライバーはまた、現在〈ライト・フィールド〉で働いているアレクサンダー・リピッシュ博士もホルテン兄弟の手がけた仕事について詳しく知っていると述べている。

フリッツ・ヴェンデル…Headquarters Counter Intelligence Corps Region IV, 970th Counter Intelligence Corps Detachment APO 407-A, US ARMY, IV-2574. Subj: WENDEL, Fritz, 1 March 1948, 6 pages. Includes Sheets I, II, III, and IV- Sketches made by WENDEL re HORTEN aircraft; No. 179332, WENDEL, Fritz, “Ex-Luftwaffe Squadron leader. Presently working for Graf Von Ledebur, French Intell [sic] officer in Vienna Austria,” 56-63.

- p. 65 **丸いケーキから大きな扇形を切り取ったような形**…Memo, Secret, Headquarters Berlin Command, Office of Military Government for Germany (US), S-2 Branch, Subject “Flying Saucers,” 3 December 1947, 126; Drawing, Directrix, Secret, 128.

空中静止できるのか?…Ibid., 57.

- p. 66 **密集隊形をつくって飛べるのか?**…Ibid., 58.

高速飛行中における緊急脱出装置…Ibid., 59.

遠隔操作できるのか?…Ibid., 58.

戦略的な目的…Ibid.

ヴァルター・ジグラー…Memo, Secret, Headquarters Counter Intelligence Corps Region IV, 970th Counter Intelligence Corps APO 407-A Subj: ZIEGLER, Walter Erich, 1 March 1948, 52-55.

四〇〇人のメンバー…Ibid., 53. ジグラーはその町を「クイビシェフ」と呼び、「モスクワの東にある町で……ロシア人の監督の下、そこでロケットが製造されている」と述べている。

- p. 67 **ホルテン兄弟が見つかった**…Headquarters 970th Counter Intelligence Corps Detachment European Command, APO 757, D-198239, Subject Flying Saucers, dated 12 March 1948, 44.

- p. 68 **ホルテン13**…この「報告書」は、もとは走り書きのドイツ語で書かれたもので、それを一等軍曹のダール・R・ブロムが翻訳したものである。そこには「ホルテン型全翼機」を製造するためにアメリカ政府が「6から30人の」ドイツ人科学者を雇う予定だとする内容があり、さらに次のように書かれている。「“ホルテン型全翼機プロジェクト”をめぐる議論の末、次のような結論が導き出された。ソ連はすでに全翼機を手に入れており、近い将来、ドイツ人専門家の助けを借りることだろう。しかし、ソ連がホルテン13と呼ばれるシリーズの製造をごく初期の段階より先に進めることは断固阻止しなければならない」この覚書の最後に、執筆者はこう締めくくっている。「アメリカ陸軍が任務を開始するにあたり、厳密な指示（活動範囲やクルーの規模、使用できる武器などについて）がくだされることを望む」

ソ連と接触…Memo from European Command Message Control Secret Priority, Ref S-3773, To : United States Forces in Austria, for Director of Intelligence, 20 May 1948, 231; extracts from Horten, Walter, From D-154654. ソ連はひょっとしたら、1925と1926年の〈ラエン・コンペティティヴ・レース〉でロシア人パイロットが操縦していたお椀型のグライダーをもとにして空飛ぶ円盤をつくったのかもしれない、とヴァルター・ホルテンは指摘している。ソ連がそのグライダーを改良したか、あるいは戦後、ユンカースかBMWのジェット推進装置をそこに取り付けた結果、空飛ぶ円盤が誕生した可能性は大いに考えられる、と。

ほぼ四年間…EG&Gのエンジニアに取材。

第3章 秘密基地

リチャード・S・レグホーン大佐、T・D・バーンズ、ロジャー・アンダーセン中佐、ミリー・マイアディアク、ボブ・マーフィ、レイ・ガウディ、エドワード・ロヴィックに取材。

- p. 70 **自宅の居間で**…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 68.

カラジャ王女の愛人…Thomas, *The Very Best Men*, 103.

- p. 71 **そのアメリカの情報機関**…CIA History Staff, “Office of Policy Coordination 1948-1952 57 pages. Approved for release March 1997.

資金の一部…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 68.

- p. 72 **ワシントンに戻り**…レグホーン大佐に取材。

ラスティ作戦…Samuel, *American Raiders*. ラスティ作戦というのは第二次世界大戦の終戦と同時に開始されたアメリカ陸軍航空軍の作戦で、その目的はドイツの航空テクノロジーに関する情報を入手し、調査するというものだった。

- そんなブットが…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 35.
- p. 73 **ブットはレグホーンの考えに**…P. Taubman, *Secret Empire*, 105.
彼らなりの考えがあった…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 27-37.
- p. 74 **第一次世界大戦というのは**…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 4.
- p. 75 **ジェームズ・キリアンの眼にとまり**…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 16. ビッセルがCIAに入局したのは1954年の1月末のことだった。1954年7月26日、アイゼンハワー大統領はキリアンに、U-2タイプの航空機が持ちうる能力について検討する専門委員会を立ち上げるよう命じた。ビッセルが正式にU-2について知らされたのはその翌月のことだった。Ibid., 30. 50
CIAの秘密テスト施設…ビッセルが初めてグルーム湖を訪れたその歴史的な日に、誰が彼に同行していたかということに関しては諸説あるが、ビッセルの回想録とロッキード社のテストパイロットだったレイ・ガウディへのインタビューに基づいて本書のようにした。
- p. 76 **ガウディは核物理学者を**…レイ・ガウディに取材。
私はアイゼンハワー大統領に…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 102-3.
- p. 77 **強風が吹くと**…レイ・ガウディに取材。
ガラガラヘビ…エドワード・ロヴィックに取材。
- p. 80 **飛行機全体の重量が変化**…トニー・ベヴァクアに取材。
- p. 81 **リクライニングチェアで**…レイ・ガウディに取材。
- p. 82 **ボブ・マーフィの出番**…ボブ・マーフィに取材。 U-2 のエンジンは、コネチカットのエンジンメーカー〈プラット・アンド・ホイットニー〉が特別に設計したP-37ジェットエンジンだった。
- p. 83 **ミスター・B**…エドワード・ロヴィックに取材。
ハンク・マイアディアク…エリア51でU-2パイロットの指導をしたマイアディアクに関する情報は、エリア51時代の古い友人の話や、彼の私文書（妻のミリー・マイアディアクから借用）から得た。
- p. 84 **慣習にとらわれないやり方で**… Killian, *Sputnik, Scientists and Eisenhower*, 82. キリアンはこう書いている。「アイゼンハワー大統領はU-2の開発を承認したが、その条件として、開発は慣習にとらわれない形でおこなわれなければならないとした。国防省の官僚主義に束縛されたり、軍内部の敵対関係に邪魔されたりすることがないようにというのがその理由だった」
議会にも…Top Secret Memorandum of Conference with the President 0810, 24 November 1954. 「大統領は3500万ドルという予算をかけて30機の高性能航空機を開発するという計画を承認したが、CIA長官のアレン・ダレスは、CIA単独でこれほど多額の予算を出したら、周囲に気づかれるのは必至だとし、その結果、国防省もかなりの予算を出すことに決まった。From the Eisenhower Archives, DDE's Papers as President, Ann Whitman Diary Series, Box 3, ACW Diary, November 1954.
- p. 85 **独立した組織**…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 105. アイゼンハワーとアレン・ダレスがこだわった機密性と効率性を保つためには、U-2プロジェクトをCIAの組織図から削除し、完全に独立した組織にしなければならないと私は主張した。その結果、プロジェクト全体がCIAの中でどこより独立した、どこより自己充足的な活動になった。
五ページのレポート…アイゼンハワー大統領はエリア51に強い関心を持っていた。国の安全を維持するためにはU-2プログラムの成功（在任中に実現されることになるのだが）が不可欠だと考えたからだ。

- p. 86 **空軍はほぼ完全に蚊帳の外**… ジョナサン・ルイスによるレオ・ゲイリー将軍へのインタビューより。録音は以下による。Chevy Chase, MD, 11 February 1994; Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 100.
ルメイは激怒する… 「最終的に、アイゼンハワー大統領が両者の争いを解決した」 Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 60; Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 109.
- p. 87 **最終的な結論**… 「すべて民間の活動にしたいと考えている」と大統領は書いている。「軍服を着たアメリカ軍の軍人がソ連の上空を飛んだりしたら、それは戦争行為になる。そんなことはまったく望んでいない」
- p. 88 **ジョージ・パパス**… ボブ・マーフィに取材。
- p. 89 **C - 54をあと九メートル高く**… 搜索任務のために、マイアディアクはU-2に乗って基地を飛び立ち、機体の残骸の位置を突き止めた。
- p. 91 **二〇〇二年にCIAが**… CIAは事故の事実は認めたが、その飛行機がエリア51に向かっていたことは認めていない。以下も参照。Kyril Plaskon, *Silent Heroes*.
- p. 92 **セキュリティシステム**… EG&G, a Division of URS, Albuquerque Operations Web site. “EG&G has provided security systems for U.S. Government facilities: Department of Energy Headquarters, U.S. Bureau of Engraving, Presidential AF-1 Hangar Complex, Rocky Flats [nuclear weapons production facility in Colorado], Tooele [Utah, Army Depot for WMD].”

第4章 陰謀の種子^{たね}

- トニー・ベヴァクア、エドワード・ロヴィック、レイ・ガウディ、アル・オドネル、ジム・フリードマン、ウェイン・ペンドルトン、T・D・バーンズに取材。
- p. 93 **UF0目撃情報**… Haines, “CIA’ s Role,” 73.
炎の十字架… トニー・ベヴァクアに取材。翼幅は31.3メートル、全長は19.2メートル。
ロズウェルで墜落事故… 以後「ロズウェルでの墜落事故」に触れる際には、先にも記したように、気球ではなく航空機について述べている。1947年の夏、ホワイトサンズではレーダー反射器を取りつけた気球を使つてのプロジェクトが進行中だったが、ロズウェルで墜落したのはそれではない。件のプロジェクトおよび関係者のひとり、チャールズ・B・ムーアが示した気球説については以下を参照。Saler, Ziegler, and Moore, *UFO Crash at Roswell*.
- p. 94 **プロジェクト・サイン**… U. S. Air Force Air Materiel Command, “Unidentified Aerial Objects; Project SIGN” ; Haines, “CIA’ s Role,” 68.
プロジェクト・グラッジ… U. S. Air Force, Project Grudge and Blue Book, Reports 1-12. 1970年代にはいつてプロジェクト・ソーサー、サイン、グラッジ、トゥウィンクル、そしてブルーブックが徐々に機密を解かれ始めてからは、まとめて国立公文書館に保存されている。http://www.archives.gov/foia/UFOs.html.
- p. 95 **テクノロジー全般を毛嫌い**… Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 17 「高空からソ連を偵察するというのは、諜報機関の本来の役割についてのアレン・ダレスの信条とは相容れなかった。彼はどちらかという伝統的なスパイの手法を好んだ。テクノロジーよりは諜報員の力量を当てにしていた」アレン・ダレスがナチの残党とことさらに手を組みたがっていたことは、時が経ち、ペーパークリップにまつわる文書がじわじわと機密を解かれるにつれ、いよいよ明白となり、問題と

化しつつある。「いずれにせよ戦後期におけるアメリカの政策決定において、対ドイツに関して言えば、ダレス氏の影響力は直接的で深甚である。彼は例えば、フランス人やイタリア人よりはドイツ人に深く信を置いている」ダレスの3ページにわたるCIAの略歴は以下より。“Secret Security Information: Subject Allen W. Dulles 7/2-127,”

UF0の部局…Office Memorandum, United States Government, To: Acting Assistant Director for Scientific Intelligence, From: Todos Odarenko, Chief, Physics and Electronics Division, SI, Subject, Current Status of Unidentified Flying Objects (UFOB) Projects, 17 December 1953.

- p. 96 **ウォルター・ベデル・スミス**…Weiner, *Legacy of Ashes*, 4, 87, 122, 131.

ロズウェルで回収された円盤…これはEG&Gの技術者へのインタビューとベデル・スミスの役割——ことにジェイムズ・フォレストルと関連しての——についての筆者の理解に基づく妥当な推測だと信ずる。戦時中は海軍長官を務め、初代の国防長官となったフォレストルは1949年5月22日に自ら命を絶った。

駐ソ連大使…CIA Center for the Study of Intelligence, Directors and Deputy Directors of Central Intelligence, Walter Smith, General, U. S. Army.

ガヴァナーズ・アイランド…National Archives Records Administration, RG 338, Box 27, G-2 Section, Headquarters First Army, Governors Island, New York, 4, New York, Case Files.

- p. 97 **きっぱりと退け**…1996年以降に機密を解かれた複数のCIA文書に基づいて筆者はベデル・スミス将軍の、CIAでの在任期間中のUF0への態度を把握した。引用はすべてこれらの文書から採った。Central Intelligence Agency, Washington 25, D.C. Office of the Director, ER-3-2809, Memorandum to Director, Psychology Strategy Board, Subject Flying Saucers, 2 pages, signed Walter B. Smith Director, undated; Memorandum for file OSI, Meeting of OSI Advisory Group on UF0, January 14 through 17, 1953, 3 pages; Scientific Advisory Panel on Unidentified Flying Objects 14-17 January 1953, Evidence Presented, 2 pages; CIA Scientific Advisory Panel on Unidentified Flying Objects, Comments and Suggestions of UF0 Panel, 19 pages; Minutes of Branch Chief 's Meeting of 11 August 1952, 3 pages; Memorandum for Director of Central Intelligence, From Deputy Director, Intelligence, Subject Flying Saucers, Dated September 7, 1952, 5 pages.

- p. 98 **さまざまな形式の芸術**…<http://www.crystalinks.com/UF0history.html>.

狼少年の叫び声…Memo, CIA Scientific Advisory Panel on Unidentified Flying Objects, Comments and Suggestions of UF0 Panel, 10. 「集団ヒステリーへと至る大衆の主観性、そして敵性勢力の仕掛ける心理戦に対する深刻な脆さにまつわる潜在的な危険」

- p. 99 **ヒステリックな大衆行動**…Haines, “CIA’ s Role,” 72.

- p. 100 **ライフ**…H. B. Darrach and Robert Ginna, “Have We Visitors from Space?” *Life* magazine, April 7, 1952.

プロジェクト・ソーサー…Haines, “CIA’ s Role,” 67-68.

- p. 101 **グリーン・ファイアボールズ**…Project Twinkle, Final Report, November 27, 1951.

- p. 102 **詮索好きな議員連中**…スタントン・フリードマンに取材。

- p. 103 **国家安全保障会議に示した結論**…U. S. Air Force Air Materiel Command, “Unidentified Aerial Objects; Project SIGN.”

- p. 104 **UF0会議**…“Minutes of the Meeting of Civilian Saucer Investigations.”

- p. 105 **ヒトラーの細菌兵器開発**…Neufeld, *Von Braun*, 206.

- p. 107 **何か「問題」があった**…Ibid., 216-22.
- p. 108 **偽物を飛ばす**…CIA Office Memorandum to Assistant for Operations, OSI, From Chief Contact Division, CO, Date:9 February 1953, Subject California Committee for Saucer Investigations.
上層部で警鐘…Special National Intelligence Estimate 100-2-57, No. 19, “Soviet Capabilities for Deception,” Submitted by the Director of Central Intelligence, 16 pages. キリアン博士が座長を務めた技術力検討委員会の取りまとめた勧告はこう記している。「偽物を見つけるためにはわれわれは諜報データをより広範に検討するなり、なにか新たな技術を創るなりしなければならない」
ジョージ・P・サットン…奇妙なことにCIAの文書はジョージ・サットンについてリーデルの同僚でUFO研究家だとしている。彼はスパイだったのか？ 寝返ったのだろうか？ みずからの意志で立場を変えたのだろうか？「ジョージ・ポール・サットン（1920-）は航空宇宙学の技術者、管理者。ロサンゼルス・シティ・カレッジで準学士号（1940年）を、カリフォルニア工科大学で理学士号（1942年）ついで理学修士号・工学修士号（1943年）を取得ののちノースアメリカン・アヴィエーション社のロケットデザイン部門で開発技術者として働き始めた。1960年代の末まで彼はロケットデザインに籍を置き続けたが、そのかわり、マサチューセッツ工科大学航空工学科でハンセーカー記念講座の教授職を（1958-59年）、国防総省の高等研究計画局（ARPA）で主任研究員、防衛分析研究所で本部長の職を（1959-60年）歴任。ロケットデザインでの仕事を離れてからはローレンス・リヴァモア国立研究所入りし、技術スタッフの一員となった」
- p. 109 **自由に収集**…Odarenko, Office Memorandum, August 8, 1955.
- p. 110 **横柄な役人**…アレン・ダレス CIA 長官がゴードン・シェラー下院議員に送った 1955 年 10 月 4 日付けの手紙。ER-7-4372A.

第5章 情報適格性

スレーター大佐、ハーヴィ・ストックマン、ケネス・コリンズ、フランク・マリー、トニー・ベヴァックア、サム・ピッツ、エドワード・ロヴィック、レイ・ガウディに取材。

- p. 112 **極秘の規定**…カーギル・ホールに手紙で取材。保安政策に関して 1995 年に発せられた中央情報長官令は米国科学者連盟の以下のウェブサイトで閲覧可能となっている。<http://www.fas.org/irp/offdocs/dcid1-19>.
- p. 113 **嘆いている**…Welzenbach, “Science and Technology, 16.
セージコントロール…スレーター大佐に取材。
まるで小説のなかの出来事…ハーヴィ・ストックマンに取材。このストックマンの登場箇所では魅力的な彼の口述歴史も情報源になっている。息子のピーター・ストックマンが取り仕切ったプロジェクトで、その成果は下記にまとめられている（未刊）。
 “Conversations with Colonel Hervey S. Stockman,” edited by Ann Paden and Earl Haney (not published).
- p. 116 **パイロットの身分も機密事項**…ケネス・コリンズ、フランク・マリー、トニー・ベヴァックア、ハーヴィ・ストックマンに取材。80 NII-88: Brzezinski, *Red Moon Rising*, 22-23, 26-30, 39-44, 98, 102（マシュー・ブレジンスキー『レッドムーン・ショック——スプートニクと宇宙時代のはじまり』NHK出版／野中香方子訳 Harford, *Korolev*, 77-80, 93, 95, 117. Also called Scientific Research Institute-88, which

included the former NII-1, per Stalin on May 13, 1946.

- p. 117 **セルゲイ・コロリョフの名を国家機密とする**…Harford, *Korolev*, 1.
湯水のように…Ibid., 93. ハートフォードはNII - 88の劇的な変貌について触れたギオルギ・ヴェトロフ——コロリョフのロシアでの伝記作者——の文章を引いている。
「あの工場が、ほかの惑星へと飛び立つロケットや宇宙船を実現可能とする、複雑で困難なテクノロジーを擁する生産拠点へとやがては発展するなどとはほとんど誰ひとり思っていなかった」
- p. 118 **ロシア版〈ペーパークリップ作戦〉**…Ibid., 75. 先にフリッツ・ヴェンデルに関連して引証した陸軍防諜部隊のメモとは別に、ハートフォードはこう書いている。「おそらくは5000人ものドイツ人が……文字どおりさらわれ、家族ともども列車や貨車やトラックに乘せられてモスクワ郊外の仕事場へと運ばれた」
- p. 119 **ドラゴン・リターン作戦**…Goodman, *Spying on the Nuclear Bear*, 177.
- p. 120 **不測の事態に対処できない**…Brzezinski, *Red Moon Rising*, 81. (マシュー・ブレジンスキー『レッドムーン・ショック——スプートニクと宇宙時代のはじまり』NHK出版／野中香方子訳)
- p. 121 **一〇〇〇機近い**…Ibid., 25. こうした北極付近での領空侵犯に関わるすべては今なお機密扱いとなっている。作戦行動については以下に記述がある。Burrows, *By Any Means Necessary*, 208-15, Bamford, *Body of Secrets*, 35-36 (ジェームズ・バムフォード『すべては傍受されている——米国国家安全保障局の正体』角川書店／瀧澤一郎訳) ELINT作戦の多くは国家安全保障局が協力していた。フィリップ・トーブマンはこう記している。「少なくとも252人の航空機乗組員が偵察飛行中に——そのほとんどはソ連に対してなされたものだ——撃墜された。そのうち90人は命をとりとめたことがはっきりしている。アメリカ軍に救助されたか、ソ連もしくは他の国に捕らえられたかが確認されているから。しかし138人の運命については不明である。*Secret Empire*, Philip Taubman.
- ホームラン作戦**…サム・ピッツに取材。
- p. 122 **ソ連指導部**…CIA Staff, “Analysis of the Soviet Union 1947-1999,” 27.
- p. 123 **迷いは深かった**…Top Secret Memorandum of Conference with the President, July 8, 1959. ダレスやビッセルとともに会議に出席した空軍准将のA・J・グッドバスターがその印象を述べている。「腹をくくって戦いに備えるか、それとも戦争を回避するため努めるのかを決定しなければいけないぎりぎりのところまで来てしまったのかどうか、大統領はいまだ考えあぐねている」
- ビッセルはそんな大統領に**…1971年7月9日、コネチカット州イースト・ハートフォードでセオドア・A・ウィルソンとリチャード・D・マッキンジーによりおこなわれたリチャード・ビッセルへの聞き書きによる。
- p. 124 **アレクサンドル・オルロフ**…Orlov, “The U-2 Program,” 5-14.
招かれざる客は撃墜する…Ibid., 7.
怒り狂っただろう…Ibid.; Brzezinski, *Red Moon Rising*, 124-35. (マシュー・ブレジンスキー『レッドムーン・ショック——スプートニクと宇宙時代のはじまり』NHK出版／野中香方子訳)
- p. 125 **武装したCIA局員**…ハーヴィ・ストックマンに取材。
- p. 126 **アイゼンハワーの家の雌牛**…P. Taubman, *Secret Empire*, 167.
ソ連の潜水艦の拠点…ストックマンはわれわれのインタビューでその時のことを振り返ってこう言っている。「あちらにはあるに違いないと大勢の人が思い込んでいたもの、つまりソヴィエトのとてつもない規模の、圧倒的な戦略爆撃部隊なんて代物が実際にはありはしないってことの確固とした証拠が得られたわけだ」

得意げな覚書…「極秘メモ／宛先：プロジェクト・ディレクター、件名：アクアトーンの諜報活動上の価値」として2000年に機密解除。ハーヴィ・ストックマンに続き、さらに三度U-2は飛ばされた。1956年7月10日、ソヴィエトは抗議の声明を出した。その日のうちにアイゼンハワーは追って通知があるまでは領空飛行をいっさいおこなわないようビッセルに指示した。ミラーのメモは大統領に向けてU-2の飛行が持つ諜報活動上の価値をかいつまんて説き、作戦を停止するほうが継続するより遥かに危険であると論じている。

p. 128 **息子のセルゲイ**…W. Taubman, *Khrushchev*, 443.

熱意を失った…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 110. 大統領はさらに述べた。もしロシアがアメリカの領空に対し同様の侵犯を企てたとしたら「その反応は激烈なものとなるだろう」と。もし国民が領空侵犯のことを知ったら、たいへんな衝撃を受けるだろうとの懸念を大統領は示した。「ソヴィエトの抗議も厄介だが、自国民の信頼を失うのはそれとはまったく次元の異なる話だ」

p. 129 **チームをつくり**…エドワード・ロヴィックに取材。

塗装を施すのはあまりいい考えとは言えない…Ibid.

CIA経由で…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 77.

p. 130 **拔擢されたひとり**…トニー・ベヴァクアに取材。

p. 132 **次のテスト**…トニー・ベヴァクアに取材。冷却実験はニュルンベルクでの医師裁判で取り上げられた。「人体を冷凍した場合の影響」と称するその実験でナチの医師たちが目論んだのは、被験者は凍らされたとき、いったい何度で心臓麻痺を起こし死に至るかを見極めることだった。

p. 133 **航空医学研究所**…Hunt, *Secret Agenda*, 10, 16, 19, 21. ハントによれば戦時中、「（ドナルド・）プットはドイツ人を集め、陸軍省上層部の承認を得ることなく彼らにライト・フィールドでの職を約束した」ハントはプット中將に直接取材している。

“Report on Events and Conditions Which Occurred During Procurement of Foreign Technical Men for Work in the U. S. A.,” September 25, 1945, Department of the Air Force, History of the AAF Participation in Project Paperclip, Appendix, May 1945–March 1947.

ナチスの強制収容所で仕事をしていた…Bower, *Paperclip Conspiracy*, 214–323. 第8空軍の軍医、ハリー・アームストロング大佐はナチの医師たちを戦後アメリカへ呼ぶよう働きかけた。「1976年にその輝かしいキャリアに終止符を打つ頃には、自分がドイツから34人の航空医学の専門家をアメリカに連れてきたことで何百万ドルもの経費が節約できた、と繰り返し誇らしげに語った。アームストロングの進めた“ドイツにおいてやりかけになっている諸々の航空医学上の研究事業を活用していく”計画は、アイゼンハワーの承認を得たものだった。委員会位はこう結んでいる。“追跡調査の必要あり。委員会としてはペーパークリップの科学者たちに関して結論を下す前に、この線で調査を続行すべきものと考え……” いまだ機密扱いとなっている諜報関連の情報がここに述べた事実関係にさらなる光を当てることは期待して良からう」以下も参照。Staff Memo to Members of the Advisory Committee on Human Radiation Experiments, “Post-World War II Recruitment of German Scientists– Project Paperclip,” April 5, 1995 (as per President Clinton).

残酷な実験…リンダ・ハントはペーパークリップとなったナチの科学者数名について書き記している。ジークフリート・ルフとヘルマン・ベッカー＝フライゼンクはダッハウの強制収容所の囚人に死の実験をおこなった。空気を高度約12000メートルの状態にした圧力室に被験者を入れたのだ。「そうした犯罪に関わったというのに、アメリカ軍はルフとベッカー＝フライゼンクを価値ある人材と見なした。ペーパークリッ

プ作戦のもと、ふたりは働き口さえ与えられ（ハイデルベルクに置かれたアメリカ空軍の施設、航空医学センター）、ダッハウの囚人たちの命を奪ったのと同種の研究を続けたのだ」とハントは記している。ルフとベッカー＝フライゼンクはペーパークリップで恒久的な職を与えられることはなかった。ふたりとも結局は逮捕され、ニュルンベルクで裁判にかけられた。ルフは無罪となったが、ベッカー＝フライゼンクは有罪判決を受け、懲役20年の刑が言い渡された。このほかで注目に値するのはコンラート・シェーファーのケースである。ドイツ空軍のパイロットが海水で生き延びられるかを研究していたシェーファーは囚人に海水を強い、渇きのせいでついに発狂にいたるまで飲ませ続けた。そして体液や血液の標本を採るため、被験者の肝臓に穴を開けた。シェーファーはニュルンベルクで被告となったが、無罪の判決が下った。その時点でアメリカは彼をペーパークリップの一員として雇い入れた。「1950年、サン・アントニオに到着したとき、彼はのどの渇きと海水の淡水化の分野でのドイツの第一人者であると持ち上げられた」とハントは書いている。*Secret Agenda*, chapter 5, “Experiments in Death,”

六億ページ…Pauline Jelinek, “U.S. Releases Nazi Papers,” Associated Press, November 2, 1999. だが、実のところ、この数字は推測に過ぎない。文書は今なお機密扱いを受けている機関——国家偵察局が1961から1992年までそうであったように——の内部に隠しておけるのだから。1988年、クリントン大統領は「ナチ戦争犯罪情報公開法」に署名した。これにより「合衆国政府はナチス・ドイツ並びにその同盟国がおこなった戦争犯罪に関する極秘のままの情報について、ことごとく——例外はごくわずかだった——その所在を突き止め、機密扱いを解き、公開することを求められることになった」この作業を監督するための省庁間作業部会が設けられた。その議長を務めたスティーヴン・ガーフィンケルは5年間の成果をこう記している。「作業部会の取り組みにより国民はついに国家偵察局の内部文書を閲覧することが可能となった。総計120万ページのすべてだ。CIA関連が11万4200ページ以上、FBIの文書が43万5000ページ以上、陸軍諜報部隊の文書が20000ページ。それ以外にも700万ページを超える記録が入手可能だ」ガーフィンケルは原子力委員会の文書についてはまったく触れていない。原子力委員会内部の民間請負業者（EG&Gなど）の文書についても。そうした業者は秘密データ（RD）扱いの文書をがっちり管理し続けている。

p. 134 **斬新でかつ型破り**…トニー・ベヴァクアに取材。

p. 136 **エドガートンの静止画像写真**…MITのエドガートン・センターで見ることができる。77 Massachusetts Avenue, Room 4-405, in Cambridge, Massachusetts. またインターネットでも閲覧可能。Edgerton.org; Grundberg, “H. E. Edgerton, 86, Dies, Invented Electronic Flash,” *New York Times*, January 5, 1990.

ケネス・J・ジャーマスハウゼン…Joan Cook, “Kenneth Germeshausen, 83, Dies; Was Nuclear and Radar Pioneer,” *New York Times*, August 21, 1990. ケネス・J・ジャーマスハウゼンに関しては、フランクリン・ピアース法律センターに置かれたケネス・J・ジャーマスハウゼン・センター、MITの記録文書、そしてアル・オドネルとジム・フリードマンへの取材からも情報を得た。

p. 137 **最重要機密と言える**…EG&Gの元従業員、アル・オドネル、ジム・フリードマン、ウェイン・ペンドルトン、T・D・バーンズらに取材。

レーダー反射の計測をおこなう施設…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 130. 興味深いことに、このCIAの文献に付された注においてEG&Gのレーダー試験施設の場所に関する情報は手を入れられ、ただ特殊活動局（OSA）の記録から採ったとのみ記されている。この点についてCIAに書面で問い合わせたが、回答は拒否された。

- p. 138 **ロバート・シーカー**…エリア51のパイロットのあいだではロバート・シーカーの事故をめぐって論争が起きた。U-2のパイロットのトニー・ベヴァクアとレイ・ガウディはパイロットのミスが墜落事故につながったと今でも思っていると筆者に語った。彼らによると、シーカーが飛行中にフェイスプレートをはずしてチョコレートバーをかじる癖があるのは有名な話だった。ベヴァクアは自身〈ダーティ・バード〉で飛んでちゃんと生還した。作戦飛行の多くはアジア方面でなされた。ロヴィックはボストン・グループの塗装が飛行機を過熱状態にしたという見解を変えていない。
- p. 140 **びゅんと空を飛んだとき**…Killian, *Sputnik, Scientists and Eisenhower*, 7.
- p. 141 **密接に連携**…Welzenbach, “Science and Technology, 18. 「キリアンはビッセルを信頼していた。1942年以来、キリアンとビッセルは特別な絆で結ばれていた」
- 数十億ドルの費用を要する**…Top Secret Memorandum of Conference with the President, July 20, 1959. 「それ（新型機）はレーダー反射断面積がごく小さく抑えられているため、敵が探知し、首尾よく追跡できる確率は極めて低いはずだ。航続距離は6400キロ。マッハ4で高度27000メートルを飛ぶ」 Office of the Staff Secretary, Subject Series, Alphabetical Subseries, Box 15, Intelligence Matters.
- 科学とテクノロジーの発展**…アイゼンハワーがスプートニク・ショックに対処しようと設けたのが高等研究計画局（ARPA）だった。「研究・開発に関わる事業を計画し、実行する高い専門性を持った防衛機関で、軍やその研究機関がその時々抱える個別の要求にはとらわれず、科学技術のフロンティアを切り開く」ことが目的とされた。1972年、ARPAはDARPAとなった。DはDefense（防衛）の意。

第6章 原子力事故

リチャード・ミンガス、アル・オドネル、ジム・フリードマン、バッド・ウィーロン博士、トロイ・ウェイド、ダーウィン・モーガン、ステイーヴン・M・ヤンガーに取材。

- p. 142 **実験は三〇回にも及び**…Defense Threat Reduction Agency, fact sheet. プラムボブ作戦はアメリカ本土でおこなわれた大気圏内核実験で、6つのシリーズからなり、24回の核爆発実験と6回の安全性テストで構成された。プラムボブの一連の実験は1957年の4月24日から10月7日まで続き、これに関わった国防総省の人員はおよそ14000名。
- 原子爆弾を輸送する飛行機**…Atomic Energy Commission, Summary of Project 57, the First Safety Test of Operation Plumbbob, report to the General Manager by the Director, Division of Military Application, 24.
- 最適という結論**…Ref. Sym 5112-(127), Appendix A, Administrative Committee Report, J. D. Shreve Jr., Sandia Corporation (seven pages, no date). “B. Area Chosen (clockwise perimeter) (Groom Mine Map) Start at intersection of 89 with north NTS boundary; follow 89 north to 51 (off map); 90 east on 51 to 04, south on 04 to Watertown (north) boundary, thence west to 95, south to NTS line, and finally west along NTS line to 89. More simply, もっと簡単に言うと、それは長方形の土地で、(1)北側をグリッド51によって、南側をネヴァダ核実験場の北端境界の延長線によって区切られ、(2)東西はそれぞれグリッド04とグリッド89が境界となっており、(3)ウォータータウンに割り当てられた土地はいっさい含まない。
- 二万年間放棄しておける敷地**…Operation Plumbbob, Summary Report, Test Group 57, Nevada Test Site, Extracted Version, May–October 1957, ITR-1515 (Extracted Version), 17.

- p. 143 **「いっさい既存の汚染」がなく**…Minutes, First General Meeting, the 57 Project, January 18, 1957, at Sandia Corporation, Red. Sym 5112-(127), declassified 8/9/83.
安全テスト…Memo dated April 2, 1957, LAV-57-33 Atomic Energy Commission, Las Vegas Branch, Office of the Branch Chief. 以下も参照。Safety Experiments, November 1955-March 1958, Defense Nuclear Agency, United States Atmospheric Nuclear Weapons Tests, Nuclear Test Personnel Review, Report Number DNA 6030.
- p. 144 **八頭の乳牛**…The University of Tennessee Agricultural Experiment Station, Knoxville, November 30, 1953, #404942, Stewart Brothers, Las Vegas, Nevada.
Through courtesy of Joe Sanders of AEC, 1-5.
三〇〇ドルを支払った…Memo to Dr. W. S. Johnson, Section Leader, Test Operations Section, University of California, Los Alamos Scientific Laboratory, Los Alamos, New Mexico, October 20, 1953, #4049641.
- p. 145 **上空から調査**…Col. E. A. Blue, DMA/AEC; J. D. Shreve Jr. SC, W. Allaire (ALO), M. Cowan (SC) all inspected the area from the air on a Special flight prior to January 18.
六〇頭から八〇頭…Minutes, First General Meeting, the 57 Project, January 18, 1957, at Sandia Corporation, Red. Sym 5112-(127), 3.
公式な地図への記入を免れ…Ref. Sym 5112-(127) Appendix A, Administrative Committee Report, J. D. Shreve Jr., Sandia Corporation (seven pages, no date). エリア13を施設内のものと見るか、施設外のものとするかは、ネヴァダ核実験場として依然見解が定まらないままである……早急に判断を下すことが極めて重要だ」結局、エリア13はいかなる地図にも記載されないことに決まり、それは今日の地図においても変わっていない。それというのもエリア13がエリア51の内側にあるからだ。地図に載ってしまえば、おのずと原子力委員会としては訊かれたくない諸々の問いが生じてくる。
- p. 146 **空輸された核弾頭**…Ibid., 6. 兵器は3月15日にユッカ・レイクの滑走路へ空輸すること。そこから11棟へ移し、爆発の準備が整う日まで保管する。点検は10棟でおこない、そこからエリア13（所定の実施場所）へと運んでいよいよ実行となる。
リチャード・ミンガス…リチャード・ミンガスに取材。
- p. 148 **アメリカ最初のダーティ・ボム**…Operation Plumbbob, Summary Report, Test Group 57, Nevada Test Site, Extracted Version, May-October 1957, ITR-1515 (Extracted Version), 85 pages.
太平洋核実験場…General information comes from Buck, *History of the Atomic Energy Commission*; O' Keefe, *Nuclear Hostages*; Fehner and Gosling, *Battlefield of the Cold War*.
ジグザグを描きながら…Fehner and Gosling, *Origins of the Nevada Test Site*, 39.
- p. 149 **アメリカ国内に実験場を用意すれば**…Ibid., 46-47.
軍用特殊兵器計画…“History of the Air Force Special Weapons Center 1 January-30 June 1957.” Department of Defense, DNA 1. 950210. 019, declassified with deletions 2/2/95. 106 code-named Project Nutmeg: Bugher, *Review of Project Nutmeg*, #404131.
気象の点でも…Fehner and Gosling, *Battlefield of the Cold War*, 37.
- p. 150 **原子力委員会の目論見**…バッド・ウィーロン博士に取材。以下も参照。Nevada Test Organization, Background Information on Nevada Nuclear Tests, Office of Test Information, July 15, 1957, #403243, 25.
- p. 151 **最も野心的な一連の核実験**…Plumbbob Series 1957, Technical Report, Defense Nuclear Agency 6005F, DARE Tracking 48584, 60-75.

- p. 152 **〈デルタサイト〉とだけ呼ぶ**…リチャード・ミンガスに取材。
- p. 155 **誰もわかっていなかった**…Safety Experiments, November 1955–March 1958, Defense Nuclear Agency, United States Atmospheric Nuclear Weapons Tests, Nuclear Test Personnel Review, Report Number DNA 6030.
- 設置される**…Ref. Sym 5112–(127) Appendix B, Particle Physics Committee Report, M. Cowan, Sandia Corporation Presiding (nine pages, no date). この文書には素粒子物理学上の計画がさまざまに論じられている。放射性降下物を集める「実験的なアプローチ」について。「気球に取りつける集塵機」や地表に置くエアサンプラー、降下物トレイ等。そして「放射性物質の降下する一帯にベニヤ造りの小屋を建てて、窓や戸を開け放しておく」作業についても具体的に記されている。「建物内部の空気と、建物そのものの汚染の程度を測定し、その数値を外部のものと比較する」その手順について。
- p. 156 **納められていた**…Plumbbob Series 1957, Technical Report, Defense Nuclear Agency 6005F, DARE Tracking 48584, 60–75, 316.
- 「母なる自然」の実験場**…リチャード・ミンガスとアル・オドネルに取材。オドネルは筆者にミュラーの未亡人を紹介してくれた。
- 気球のひとつが吹き飛ばされ**…Telex TWX 01A 2008242, From Reeves Attention Gen AD Starbird, 1957 Apr 20 AM 3:39. 以下も参照。“Feasibility of Weapon Delivery By Free Balloons,” OSTI ID: 10150708; Legacy ID: DE98056381, 34 pages.
- p. 157 **E G & Gの社員の操作**…Operation Plumbbob, Summary Report, Test Group 57, Nevada Test Site, Extracted Version, May–October 1957, ITR-1515 (EX). Sandia Corporation, Albuquerque, NM, October 10, 1958. “At 0350 PST. 「4月24日の太平洋標準時0350時、C地区の東300メートルの地点で50 kilogramsのダイナマイトに点火し、煙の高さが予測どおりか確認した。点火のタイミングも点火回路もシンプルそのもの。試験グループ監督の指示のもと、EG&Gの社員が点火をおこなった」
- p. 158 **北に向けて拡散**…Ibid., 55 (6.1., Weather Observations). 天候は実に細かく記録されている。皮肉なことだ。軍当局との連絡係として働いていたEG&Gの従業員の証言によると、現場ではそれ以外のことはなんであれ、かなりいい加減に進められていたらしいのだから。「1957年4月10日。太平洋標準時2100時から2330時のあいだのホドグラフによれば、2100の時点ではコンディションは良好であったが、2300の観測で風向きが北西へと変わったことが確認されると取り止めるようにとの勧告が出された。1957年4月1F日（原文ママ）。0441時には風の状態は良好であったが、朝の風向き変化が思いのほか早く起きた。0530頃には風ははなはだ強くなり、キャンセルやむなしとなった。1957年4月20日、19日2230時から降り始めた小雨は夜のあいだ、そして朝まで断続的に降り続いた。ホドグラフを見るとこの間、良好な風が吹いていたようだったが、計器類が濡れていたためキャンセルを余儀なくされた。1957年4月24日。中層雲が切れ切れに広がるのを確認。夜間にしつとりと露が降りている。0415時から0756時の風の推移がホドグラフに示されている。点火は0627時になされた」
- 実際「ダーティ」なもの**…1982年6月、サンディア社は“汚い爆弾”のもたらした結果、すなわち〈プロジェクト57〉によるプルトニウム汚染の影響に関する研究を102ページの抄録のかたちで国防総省核兵器局長官に報告した。エリア13の後始末代わりというわけである（第18章を参照）。本章で取り上げた情報はこの抜粋版から採っている。研究のねらいとしてそこで挙げられているのは、「実験直後の、そして長期的に見てのプルトニウムの分布状況を推定し、その分布がいかんにして生じたのかを理解すること、プルトニウムで汚染された環境について生物医学的な評価をおこなうこと、実際の除染の方法を探ること、アルファ線測定器の機能と検査の仕方について評価をお

こなうこと」である。それにしてもエリア13の除染は25年のあいだ、一顧だにされなかったのだ。

抜粋がまとめられた…サンディア社（ニューメキシコ州アルバカーキ）が1958年10月に取りまとめた原報告書（今なお機密扱いのまま）はITR-1515と呼ばれる。

アルファ崩壊による半減期…Ibid., 17（“Motivation and Mission, 1.1 Historical Resume”）。報告書によると「胃にたどり着いてしまえば、体内に留まる時間はわずかである。（プルトニウムの粒子は）不活性物質として排出され、人体に吸収されることはまったくないと言っていいほどである。呼吸から取り込むのは、それとはまったく異なるメカニズムであって、相当な脅威となる。気道の奥にまで達するほど微細な粒子なら肺胞表面にくっつき、留まって放射線による障害を及ぼすこととなる可能性が極めて高いことは明らかなだ。……その影響をなんら受けることなく生きつづけることはできない。プルトニウム239のアルファ崩壊による半減期はおよそ2万年に及ぶのだから」

p. 159 **漂うプルトニウム**…Ibid., 7（“Foreword, Abstract”）。

p. 161 **土の量は一八トン**…Ibid., 101（8.6, “A New Program”）。「1周年の測定の際、参加者が議論したなかから出てきたひとつの考えを突き詰めてみることに、とうとうカーミット・ラーソン博士も同意した——ミミズの件である。『コンプトン百科事典』によると、かの有名なチャールズ・ダーウィンは4000平方メートルの庭について調査した結果、53000匹の働き者のミミズが動かす土の量は18トンに達すると主張した。こうしたミミズによる土壌の移動、ミミズの生体による化学反応でプルトニウムが変化する可能性等は、核兵器事故に見舞われた環境の復興に、知らず知らず甚大な影響を与えかねない」

p. 162 **ポーリングによれば**…2 ページにわたるこのくだりと 168 ページから 170 ページにかけての新聞記事からの引用は、核実験博物館（ネヴァダ州ラスヴェガス）の図書室に置かれた膨大な新聞記事アーカイヴから。

p. 164 **国防総省は**…Fehner and Gosling, *Battlefield of the Cold War*, 159–82.

エリア51の全職員にも…リチャード・ミンガスに取材。

p. 166 **教化プロジェクト**…DNA 6005F, Plumbbob Series 1957, United States Atmospheric Nuclear Weapons Tests, Nuclear Test Personnel Review, Chapter 4, Exercise Desert Rock VII and VIII Programs, 81, 96.

人材委員会…Memorandum, Members of the Advisory Committee on Human Radiation Experiments, September 8, 1994, “Human Experiments in Connection with the Atomic Bomb Tests,” attachment 5, item 10.

架空の攻撃…フード爆弾の実験の際、海兵隊は空・陸両面での攻撃演習を実施した。ヘリコプターによる緊急空輸の訓練、戦術航空支援の訓練などもおこなわれた。

“Exercise Desert Rock VII–VIII, Operation Plumbbob,” Defense Nuclear Agency 4747F.

p. 168 **ミンガスにも見えた**…リチャード・ミンガスに取材。

p. 171 **人の住めない場所になっていた**…リチャード・ミンガスに取材。以下も参照した。
Office Memorandum, United States Government, Observed Damage at Watertown, Nevada, following the Sixth Nuclear shot of Plumbbob, July 9, 1957. R. A. Gilmore, Off-Site Rad-Safe, NTO, #0150371.

第7章 ゴーストタウンからブームタウンへ

T・D・バーンズ、ピーター・メルリン、アル・オドネル、リチャード・ミンガス、ジム・フリードマン、エドワード・ロヴィック、トニー・ベヴァクア、レイ・ガウディ、アーニー・ウィリアムズ、ハリー・マーティン、スレーター大佐、フランク・マリーに取材。

- p. 172 **ガイガーカウンターを持って**…T・D・バーンズに取材。Operation Plumbbob Projects and Reports:Program 2, Project 2. 2., Neutron Induced Activities in Soil Elements WT-1411;Project 2. 5 Initial Gamma Radiation Intensity and Neutron-Induced Gamma Radiation of NTS Soil WT-1414.

白衣に作業用ブーツ…Photographs viewed at the Atomic Testing Museum library, Las Vegas.

ピンの頭程度のものから…DNA 6005F, Plumbbob Series 1957, United States

Atmospheric Nuclear Weapons Tests, Nuclear Test Personnel Review, Chapter 4, Exercise Desert Rock VII and VIII Programs, Civil Effects Test Group, Fallout Studies, 204-247; AEC Research and Development Report BNWL-481-1, 113 pages.

核科学者にとって驚き…McPhee, *Curve of Binding Energy*, 166-67.

- p. 173 **磁石を使って**…Roadrunners Internationale newsletter, August 1, 2009, 34th edition. グルーム鉱山の所有者で経営者であったダン・シーアンの個人的な日記に基づく。当該の日記はシーアンの曾孫リサ・ヒーウッドがロードランナーズ・インターナショナルに提供した。

次のテストに向けて…アル・オドネル、リチャード・ミンガス、ジム・フリードマンに取材。核実験一時停止が間近に迫っていて、すべての核実験は1958年10月31日までに終えなければならないという事情があった。デッドラインまでにできるだけ数をこなそうと技術者たちはしやにむに働いたのだった。

よく見られた動物たち…匿名の証言者が、瀕死の馬が水を求めてエリア51をさまよっているを目撃したときの恐ろしさを筆者に語ってくれた。広範囲にわたる記録の蓄積があるはずだが、原子力委員会は動物に関する観察記録をまったく公開してこなかった。1957年7月15日に原子力委員会が一般向けに発表した「アメリカの核兵器計画への責任」と題する文書の「操業管理」の項にはこんなことが書かれている。「爆心地から数キロメートルのところで草を食んでいた牛や馬は皮膚表面にベータ線による火傷を負ったが（1952年と1953年の一連の核実験のこと）、その繁殖価値や牛肉の品質にはまったく影響はない。爆心地から数キロ以上離れたところでの放射性降下物は人体にも、動物や農作物にもまったく害はない」 John G. Fullerはこれとは正反対の見解を示している。 (*The Day We Bombed Utah*)

緊急着陸した…ピーター・メルリンに取材。

- p. 174 **エドワード・ロヴィック**…エドワード・ロヴィックに取材。

- p. 176 **「ステルス」の創始者**…A-12の作業に携わる以前、ロヴィックのスカンク・ワークスでの最初の仕事はU-2からソ連のレーダー・システムへと送り返されるレーダー反射を抑える取り組みだった。放射性降下物のせいでエリア51が閉鎖されていたため、カリフォルニアのエドワーズ空軍基地の北のはずれにぽつんとある格納庫がロヴィックの仕事場となった。ロヴィックとその同僚はそこでありとあらゆるレーダー攻略法のアイディアを出し合った。「飛行機の高度の点で妥協せず、シーカーの事故のときのようなオーバーヒートが油圧系統に生じることも許さない——何かそういうものを創り出すのがわれわれの仕事だった。ケリー・ジョンソンが打ち出したルールがあった。1ポンド余計な目方が加わると飛行機の高度は1フィート低くなる。それは

つまり、われわれが施すカムフラージュのコーティングは4分の1インチ（約0.64cm）を超えてはならないし、できるだけ軽くなければならないということだった」

革新的なまでに特異なもの…エドワード・ロヴィック、バッド・ウィーロン博士、T・D・バーンズに取材。ほかの政府関連機関も秘かに超音速飛行の実験を重ねていたが、マッハ3での飛行を維持できずにいた。空軍とNASA、そして海軍は実験的なX-15の開発——この極超音速機の研究がのちの宇宙飛行の礎となった——を共同で進めていた。だが、X-15は母機の背中から空中発進するものだった。これに対し、CIAの新型機は自力で滑走路から飛び立ち、同様に基地へと帰ってくるというのが前提だった。Peebles, *Dark Eagles*, 51.

- p. 177 **正確さも速度も失われて**…バッド・ウィーロン博士に取材。

あらゆる詳細に精通…Jones, *The Wizard War*. ロヴィックは時間をかけて筆者にレーダーの基本概念について説明してくれた。レーダーが誕生したのは1904年のこと。ドイツのエンジニア、クリスチャン・ヒュルスマイヤーが電磁波を利用すれば濃い霧のなかにいる船を探り当てる、あるいは“見る”ことができると考えたのがそもそもの始まりだった。やがて軍隊がその潜在的な価値に気づいた。肉眼では確認できない、動く、大きな金属製の物体を探知する有効な手立てであることに。船と飛行機という20世紀の戦争における二大輸送手段のどちらにもばっちり対応できるというわけだった。

- p. 178 **一四歳の少年に**…エドワード・ロヴィックに取材。高校に上がる頃、ロヴィックはくず鉄と真空管、それに捨てられていたラジオの部品を使って無線受信機をこしらえた。手製の受信機で「100キロ以上先からの信号を捉える」ことに成功した彼は「それまではそこにあると確かめられずにいたものを見出したという強烈な感覚を得ることができた」と言う。

- p. 180 **アークエンジェル - 1**…Robarge, *Archangel*, 4-5. 「アークエンジェル」とは「大天使」の意だが、ロシア北西部の港湾都市アルハンゲリスクの名前でもある。英語圏ではかつては英語式の呼び名アークエンジェルのほうが通りがよかった。数あるソ連のレーダー基地の拠点で、のちにソ連側はそこからA-12の追跡を試みることとなる。

- p. 181 **従業員五〇名**…Ibid., 6.

原寸大模型…Johnson, *History of the Oxcart Program*, 5.

- p. 182 **チタニア**…United States Nuclear Tests July 1945 through September 1992 DOE/NV-209-REV 15, 144. 爆弾は天王星の衛星の名に因んで命名された。

- p. 185 **ロヴィックのチーム**…エドワード・ロヴィックに取材。

- p. 187 **魔法の飛行機**…Rich, *Skunk Works*, 198. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)

- p. 188 **セシウム化合物を加える**…Johnson, *History of the Oxcart Program*, 4. ジョンソンはこう記している。「われわれはセシウム化合物を燃料に加えることを提案した。これは先進開発企画のエド・ロヴィックが思いついたアイディアだったが、開発の総仕上げはプラット・アンド・ホイットニーに委ねた」新型機のエンジンのテストがおこなわれているフロリダのプラット・アンド・ホイットニーの研究所へ赴いたときのことを回想して、ロヴィックは言う。「自分としては気体の熱電離に適用される理論を応用したわけで、高熱固体表面からの電子放出にあてはまるパラメーターを用いる必要があるのはわかっていた。試してみても固体と気体を混ぜてやるといいとわかったんだが、イオン化したものを作り出すのに二種類の素材、固体と気体をどんな配分にしたらいいのか、それがわからなかったんだ。実験結果は有望なものだったが、われわれとしてはもっとよく知っておかなければならなかった。それでより優れた施設へと移ったんだ。コネチカット州イースト・ハートフォードにあるプラット・アンド・ホ

イトニーのウィルグース・タービン研究所へと」問題が解決を見たのはそこだった。

- p. 189 **A - 12は最も速い**…CIA Document E0 12958 3.3(b) Oxcart Facts: A-12 Specifications; A-12 Experience Record (as of July 10, 1967). ロケット飛行機 X- 15がマッハ6に迫ったのは(時速6585キロ) 1961年11月のことだった。この会議の時点では、CIAは自分たちが世界最速の飛行機を造っていると考えていた。これは厳密に言って正しい。X-15は自力で飛び立つのではなかったから。
活気を取り戻す…Parangosky, *The Oxcart Story*, 3. ウィーロン博士によると、パラングンスキーこそ、このオックスカートに関する重要な記録の真の執筆者であり、ほかのいかなる名前も偽名である。1960年2月11日、公式に署名された。
作業員を雇い入れた…アーニー・ウィリアムズに取材。
はるかに長い滑走路と五〇〇〇立方メートルの容量を持つ燃料貯蔵所…ハリー・マーティンに取材。Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 25-26.
- p. 190 **空飛ぶ燃料タンク**…ハリー・マーティンに取材。
- p. 191 **独自の小さな空軍**…スレーター大佐に取材。
A - 12を飛ばすのに…フランク・マリーに取材。
三〇〇キロ…スレーター大佐に取材。
北アメリカ航空宇宙防衛司令部…バッド・ウィーロン博士、スレーター大佐に取材。
- p. 192 **簡単なスケッチ**…エドワード・ロヴィックに取材。
S・ヴァレンツォフ…CIA Memo, S. Varenstov, Chief Marshal, USSR, The Problem of Combat with the Nuclear Means of the Enemy and Its Solution, August 1961.
空からの諜報活動…バッド・ウィーロン博士、エドワード・ロヴィック、T・D・バーンズに取材。

第8章 転落するネコとネズミ

ゲイリー・パワーズ・ジュニア、T・D・バーンズ、バッド・ウィーロン博士、ジム・フリードマン、ジーン・ポティート、ヘレン・クレイラ(リチャード・ビッセルの長年の秘書。手紙でのやりとりにて) に取材。

- p. 193 **また汗だくになるだろう**…Powers, *Operation Overflight*, 75.
- p. 194 **ソ連のケーブ・カナヴェラル**…CIA report on U-2 Vulnerability Tests, April 1960, Eisenhower Archives, Office of the Staff Secretary, Subject Series, Alphabetical Subseries, Box 15, Intelligence Matters. Memo: ICBM Targets- The Urals and Tyura Tam. それによると「ウラルのスヴェルドロフスクに大陸間弾道ミサイル(ICBM)の工場があると見てまちがいない」とある。U-2のカラーの飛行地図はこのファイルにある。
プレセツクの施設に向かう…Harford, *Korolev*, 112. R-7とR-7Aは、バイコヌールの2基の発射台のみに配備されていた。が、のちに1959年までに準備が整っていたプレセツクの4基の発射台にも配備される。プレセツクはまもなく、ソ連にある3つの発射施設のうち最も活動が盛んな施設となる。偵察衛星やほかの軍事衛星を軌道に乗せる役割を担っていた。
ほぼ八〇センチ刻み…Brugioni, *Eyeball to Eyeball*, 185.
- p. 195 **話がしたい**…Powers, *Operation Overflight*, 69.
予期していた…Ibid.

- p. 196 **電話の鳴る音に**…W. Taubman, *Khrushchev*, 443.
- p. 197 **眼への鋭いひと突き**…Khrushchev, *Khrushchev Remembers*, 444. (フルシチョフ『フルシチョフ最後の遺言』河出書房新社／佐藤亮一訳) より。「このスバードローフスク方面への最新の飛行は、特にわが領土への深い侵入であり、したがってそれは特にわが主権を大胆不敵に侵犯したものであった……彼らのこの飛行は、われわれの無気力を示すためのものだったのだ。しかし、われわれはもういつまでも無気力ではなかった」
- 厄介な状況になってきていた**…Orlov, “The U-2 Program,” 10.
- p. 198 **秘密の生物化学兵器計画**…Hoffman, *The Dead Hand*, 119.
- p. 199 **ロスアラモスとサンディアを足したところに値する**…Brugioni, *Eyeball to Eyeball*, 43.
- 標的を破壊せよ**…Orlov, “The U-2 Program,” 11.
- 立ち止まって考えろ**…Powers, *Operation Overflight*, 83.
- 敵は左に曲がっている**…Jack Anderson, “US Heard Russians Chasing U-2,” *Washington Post*, May 12, 1960.
- p. 200 **クイシトウイム40の声を聞く**…Bamford, *Body of Secrets*, 49.
- p. 201 **ビル・ベイリーは帰還せず**…Richelson, *Wizards of Langley*, 18.
- 銘柄はライカ**…Powers, *Operation Overflight*, 91.
- p. 202 **撃墜されることになったとしても**…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 121-22. しかし、ビッセルはこうも認めている。「CIAは“満場一致”で“飛行機に搭載された大きなフィルムが壊れることはない”と合意していたと。不燃性の物質が燃えることはない。16キロ上空から落ちても壊れることはないだろう。墜落という事態になれば、複数のフィルムが地面に転がっていることになるだろう。それはわれわれにもずっとわかっていた。しかし、われわれにできることはあまりなかった」
- 主張しつづけた**…Department of State, for the Press, No. 249, May 6, 1960; Department of State, for the Press, No. 254, May 9, 1960.
- 証拠があった**…Incoming telegram, Department of State, Control 6700, May 10, 1969.
- 威勢よく**…W. Taubman, *Khrushchev*, 455-58.
- p. 204 **辞任したい**…P. Taubman, *Secret Empire*, 396.
- 頭を下げようとしなかった**…Bamford, *Body of Secrets*, 53-54. (ジェームズ・バムフォード『すべては傍受されている——米国国家安全保障局の正体』角川書店／瀧澤一郎訳) より。「アイゼンハワーにとって、すべての成り行きが自分をじわじわと狂気に追い込む水責めになっていくように思えた。毎日、少しずつ真相がしぼり出されていくような気分だった」
- p. 205 **このときが初めて**…Brugioni, *Eyeball to Eyeball*, 49.
- ソ連軍の基地**…Ibid., 55.
- 二五分で**…キューバのハヴァナからワシントンまでの距離は1820キロ。1960年、ロシアのミサイルの飛翔速度はおおよそマッハ3.5だった。
- p. 206 **パワーズの裁判中**…“Report on Conclusion of Powers Trial, USSR International Affairs,” August 22, 1960, approved for release September 1985, 39 pages.
- ラスヴェガスの射撃場**…Ibid., RB-6.
- 犯罪的陰謀**…Ibid.
- ヒトラーの追隨者**…Ibid., RB-20.
- p. 207 **U - 2の訓練施設**…Powers, *Operation Overflight*, 114.
- U - 2の後継機**…Parangosky, *The Oxcart Story*, 6-7.
- リチャード・ビッセルの提案で**…バッド・ウィーロン博士に取材。

- p. 208 **禁止区域P 2 7 5**…ピーター・メルリンに取材。
一三〇〇万という部品…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 133.
すべてを支えたのがチタン…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 21-22.
- p. 209 **九五パーセント近く**…Robarge, *Archangel*, 11.
数十億ルーブル…エドワード・ロヴィックに取材。
- p. 210 **禁句と思っている**…Poteat, “Engineering and the CIA,” 24.
- p. 213 **CIAに引き抜かれ**…T・D・バーンズに取材。CIA Personal Resume, 1966, Barnes, Thornton Duard.
- p. 215 **打倒しなければならない**…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 153.
- p. 216 **「リチャード・ビッセル」と答えて**…Thomas, “Wayward Spy,” 36.
- p. 217 **自分の頭をぶち抜いた**…Weiner, *Legacy of Ashes*, 303. (ティム・ワイナー『CIA秘録』文藝春秋／藤田博司、山田侑平、佐藤信行訳)
コチーノス湾…Kirkpatrick, *The Real CIA*, chapter 8; Pfeiffer, *CIA's Official History of the Bay of Pigs*; Warner, “CIA's Internal Probe.”
情報収集にも…セオドア・A・ウィルソンとリチャード・D・マッキンジーによるリチャード・M・ビッセル・ジュニアへのインタビュー記録。1971年7月9日、コネチカット州イースト・ハートフォード。
- p. 219 **カーティス・ルメイ将軍のせいに**…Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, 176. 海兵隊総司令官の代理を務めていたルメイも所属した統合参謀本部の「すぐに空爆を中止せよ」との決定を論じるなかで、ビッセルは次のように述べている。「彼らの見解は空軍とCIAの対立関係を反映していたと言えるかもしれない。CIAの上空の偵察計画における成功が、空軍のとある高官たちの気分を害していたのだ」これは明らかにルメイのことを指している。ビッセルはさらに「軍内部の友人がこのことについて率直に語ってくれた」とも述べており、「U-2やSR-71（オックスカートはまだ機密解除されていなかった）や偵察衛星計画においてCIAが引き受けた活動はすべて空軍の管轄下でおこなわれるべきだったとする意見が存在していたことは否定できない。ロバート・アモリーは1966年のインタビューで、私がU-2計画を任されてから“空軍の眼があれに注がれた。はじめから彼らは腹を立てていた”と回想した」と記している。ビッセルにとっては「その怒りが消えることはなかった」
支援を適切におこなっていれば…Ibid., 175. 「（海兵隊総司令官の代理を務めていた）カーティス・ルメイと一部の上官は、上空援護がどうしても必要だということに疑問を持っていることを認めた……私はショックを受けた。空からの支援がなければ、プロジェクトが失敗することは、われわれにはわかりすぎるほどわかっていたのに」
時差の混乱…Ibid., 189. ビッセルはこう書いている。「しかしながら、翌日、B-26が上空に現われても、海軍の支援部隊が現われることはなかった。正確な時間を誤解していたせいで、空からの支援部隊が予想された時間に標的領域にすることができなかったようだった。結果として、B-26は戦場から撤退させられるか、撃ち落とされた。最後の悲劇的な打撃だった」国家安全保障局の保管記録には「覆面のジェット機が爆撃機との合流に失敗した。これはCIAと国防総省がニカラグアとキューバの時差を認識していなかったせいである」とある。
ライマン・B・カークパトリック・ジュニア…ジム・フリードマンに取材。
- p. 220 **ポリオにかかり**…Biography of Lyman B. Kirkpatrick, Princeton University Library, Department of Rare Books and Special Collections, Seeley G. Mudd Manuscript Library, Public Policy Papers. Lyman B. Kirkpatrick Papers, circa 1933-2000, Call Number MC209.

二番手の監察総監…ビッセルは回顧録で率直に語っている。「カークパトリックは野心家だった。ポリオで体が麻痺していたにもかかわらず、CIAの長官になりたがっていた。しかし、その病気のせいで、刺激的でやりがいのある計画本部の仕事から、もっと平凡で官僚的な監察官という仕事に移ることを余儀なくされた。この降格を彼はずっと恨んでいた」

第9章 基地の再構築

ハリー・マーティン、ジム・フリードマン、T・D・バーンズ、アル・オドネル、ピーター・メルリン、ミリー・マイアディアクに取材。

- p. 221 **エリア51の物資調達係**…ジム・フリードマン、T・D・バーンズ、アル・オドネルに取材。
- p. 225 **北東の外辺部**…ピーター・メルリンに取材。彼はCIAのオンライン資料室からカークパトリックのエリア51訪問に関する資料（大幅な修正入り）のコピーを入手していた。これらの文書はその後、削除されたようである。
- p. 226 **標的になりうる**…ピーター・メルリン、ジム・フリードマンに取材。
ハンティングもしようと…ジム・フリードマンに取材。ハंक・マイアディアクの私文書。
- p. 228 **ビッセルが辞職**…セオドア・A・ウィルソンとリチャード・D・マッキンジーによるリチャード・M・ビッセル・ジュニアへのインタビュー記録。1971年7月9日、コネチカット州イースト・ハートフォード。Harry S. Truman Library and Museum, <http://www.trumanlibrary.org/oralhist/bissellr.htm>.
- p. 229 **偵察機計画にはCIAを**…Welzenbach, “Science and Technology,” 23.
リチャード・ビッセルひとりの…Ibid., 22.
連携を強化して…Richelson, *Wizards of Langley*, 58–60.
ウェイン・ペンドルトン…ウェイン・ペンドルトンに取材。
- p. 230 **汚い策略**…Welzenbach, “Science and Technology,” 22. 全文は以下の通り。「しかし、仲たがいの兆候は、ビッセルのランドとキリアンとの関係に忍び寄っていた……ランドとキリアンは科学技術をほとんど宗教と同じように見ている。不健全な目的のために悪用する者たちが科学技術を汚すことは、なんとしても阻止しなければならない神聖なものと考えていた。このカテゴリーにあてはまるのが、秘密工作とリチャード・ビッセルの計画本部の“汚い策略”だった」
- p. 231 **「ティーク」と「オレンジ」**…ラスヴェガスの核実験博物館にて視聴された映像。
ちょうどオゾン層がある…Hoerlin, “United States High-Altitude Test,” 43.
これらの実験…Ibid., 47.
キリアンの言い分…地上基地が爆発の結果として起こる音波を計測することになっていたが、ティークは11キロ南にそれて爆発し、通信システムは破壊された。オレンジも予定より6キロ上空で爆発し、「その狂いはデータ収集に影響を与えた」
頭を道具で固定され…空軍のジョン・ピカリング大佐へのインタビュー記録。52. ラスヴェガスの核実験博物館にて視聴された映像。
- p. 232 **“穴をあける”かどうか**…Hoerlin, “United States High-Altitude Test,” 43.
- p. 233 **フォン・ブラウンの姿**…ラスヴェガスの核実験博物館の資料室にて視聴されたティークの映像。
島を去っている…アル・オドネルに取材。Neufeld, *Von Braun*, 332.
ヒトラーの隠れ家…Neufeld, *Von Braun*, 127.

アーガス作戦…Final Review of Argus Fact Sheet, 16 Apr. 82. 実験は完全に秘密裏におこなわれ、翌年まで公表されることはなかった。

- p. 234 **キリアンを説得**…Killian, *Sputnik, Scientists and Eisenhower*, 187.

最も見事な出来事…The White House Memorandum for the President, From J. R. Killian Jr., Subject: Preliminary Results of the ARGUS experiment, dated November 3, 1958, declassified 5/20/77.

- p. 235 **ウォルター・サリヴァン**…手紙には「手渡し」と記載されている。〈ニューヨーク・タイムズ〉のレターヘッドに書かれたその手紙は1959年2月2日付けとされており、ホワイトハウスのジェイムズ・R・キリアン・ジュニア博士宛てになっている。

否定も肯定もしない…Memorandum to Dr. James R. ジェームズ・R・キリアン・ジュニア博士宛ての覚書。主題：アーガスの情報公開について。1959年1月20日付け。大統領特別補佐官カール・G・ハー・ジュニアの署名。とりわけ興味深いのが、ホワイトハウスの便箋に「キリアン博士」と書かれていることである。彼は博士ではなかった。博士号は取得しておらず、経営学で学士号を取得しているのみである。この事実にはマサチューセッツ工科大学の図書館員ジュニファー・ハーシュによって確認された。「ミスター・キリアンはいつも、わざわざ自分から、自分は博士でないと言っていました」と彼女は言った——ホワイトハウスに関しては、彼はそうしなかったようだが。

議会の追及から守られる…Killian, *Sputnik, Scientists and Eisenhower*, 25.

- p. 236 **まだそこにいるのか?**…Admiral Parker of the Armed Forces Special Weapons Project; Defense Technical Information Center Staff, *Defense's Nuclear Agency 1947-1997*, 140; Defense Threat Reduction Agency, 2002.

第10章 科学、テクノロジー、仲介の達人たち

ハリー・マーティン、ルイス・シャルク、バッド・ウィーロン博士、スレーター大佐、フランク・マリー、ロジャー・アンダーセン、ケネス・コリンズに取材。

- p. 238 **エリア51にいた**…ハリー・マーティンに取材。

軍の高官たち…Classified Message, Secret 2135Z 14 May 62, To Director, Prity [sic] OXCART. 「1. パワー大将、コンプトン大将、モントヤ大佐、ギアリー大佐（修正入り）、A-12……飛行期間中、訪問者らの姿があった（修正入り）……ケリー・ジョンソンはそのグループと一緒にラスヴェガスへ帰った……パワー大将はその航空機にひどく感銘を受けている様子だった」CIAによって2007年8月に機密解除。

- p. 239 **ルー、起きろ!**…ルイス・シャルクに取材。

- p. 241 **機体が揺れはじめた**…Johnson, *History of the Oxcart Program*, 12.

- p. 242 **ルー、なにやってるんだ?**…Rich, *Skunk Works*, 219. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)

墜落する…ハリー・マーティンに取材。

- p. 243 **貴重な映像**…CIAの映像、T・D・バーンズの個人コレクション。

- p. 244 **バッド・ウィーロン**…Central Intelligence Agency, “Biographic Profile, Albert Dewell Wheelon,” May 10, 1966, NARA, MRB, RG 263.

ハワードとジェーン・ローマン夫妻…Helms, *A Look Over My Shoulder*, 275. CIAの防諜部が設置されたとき、ジム・アングルトンがFBIとの業務連絡係として責任を負った。戦略諜報局（OSS）のX-2担当ベテラン職員、ジェーン・ローマンが日々の会議を受け持った。

科学顧問に引き抜かれ…Central Intelligence Agency, R. V. Jones Intelligence Award Ceremony Honoring Dr. Albert Wheelon, December 13, 1994.

新しい“エリア51の市長”…バッド・ウィーロン博士に取材。

- p. 247 **報告の分析**…McAuliffe, *CIA Documents on the Cuban Missile Crisis 1962*, 1-31.

技術兵一七〇〇人…Ibid., 37.

電波妨害ができる施設…Ibid.

ハネムーンのために…バッド・ウィーロン博士に取材。

- p. 248 **ゲイリー・パワーズ事件の二の舞**…これは1960年代を通して軍事計画立案者のあいだで共通のテーマだった。

大統領の承認…Office of Special Activities DD/S&T Chronological History, 30 August 1966. 機密事項。2001年7月に公開を承認。「1962年10月5日、キューバ上空におけるCIAの最後の飛行（全部で50回飛行）」

先制攻撃を仕掛けるよう…Brugioni, *Eyeball to Eyeball*, 265.

マコーン長官から依頼されて…バッド・ウィーロン博士に取材。

- p. 249 **ルメイ将軍にも**…Richelson, *Wizards of Langley*, 53.

英雄的行為…アメリカ空軍の公式ウェブサイト、ジャック・C・レッドフォード准将（1970年10月1日に退役、2007年11月16日に死去）の伝記。

鎮痛剤を投与…この話はエリア51でレッドフォードの下で働いていた人々のあいだでは伝説的な話であり、スレーター大佐やフランク・マリーら数人のインタビューで証言されている。レッドフォードのうしろに坐っていたハリー・C・ミラー曹長は結局、レッドフォードと衛生兵に助け出された数時間後、もとの傷が原因で亡くなっている。

- p. 250 **CIAの偵察機**…バッド・ウィーロン博士に取材。

CIAのU-2を操縦した空軍のパイロット…Richelson, *Wizards of Langley*, 54.

p. 251 **その写真**…Brugioni, *Eyeball to Eyeball*, photographic inserts.

第11章 どんな飛行機？

ケネス・コリンズ、ドナルド・ドノヒュー、サム・ピッツ、フランク・マリー、ロジャー・アンダーセン、フローレンス・デルナ、フランク・ミカリッツィ、ハリー・マーティンに取材。

- p. 252 **ケン・コルマー**…ケネス・コリンズに取材。彼は初めて暗号名を明かしてくれた。

- p. 253 **実際にアテネまで**…Powers, *Overflight*, 59.

- p. 256 **北朝鮮にはいり込み**…Citation, First Lieutenant Kenneth S. Collins, SO. No. 221 Hq FEAP, APO925, 6 May 53, by Command of General Weyland.

ミグ戦闘機の銃撃…Ibid.

空軍殊勲十字章…Citation to Accompany the Award of the Distinguished Flying Cross (First Oak Leaf Cluster) to Kenneth S. Collins. AO 2222924, United States Air Force.

銀星章…Citation for Silver Star, First Lieutenant Kenneth S. Collins, by direction of the president.

- p. 257 **全部で五機**…Robarge, *Archangel*, 17.

- p. 258 **ドナルド・ドノヒュー大尉**…ドナルド・ドノヒューに取材。

ジャック・ウィークス…ケネス・コリンズに取材。

- p. 259 **高度計の値が一気に下がり**…ケネス・コリンズに取材。
- p. 263 **途方もない量の仕事**…サム・ピッツに取材。
- p. 264 **馬を使って**…ケネス・コリンズに取材。
上級将校たちによって…スレーター大佐に取材。
- p. 265 **パットン将軍**…General Robert J. Holbury biography, Air Commander, Detachment 1 of the 1129th U.S. Air Force Special Activities Squadron at Groom Lake, Nevada; Roadrunners Internationale Official Web site.
- p. 267 **ピトー管**…ケネス・コリンズに取材。Parangosky, *The Oxcart Story*, 11.
電話まで盗聴…CIA副長官に宛てた覚書。1964年3月10日付け。Attachment 1 to BYE-2015-64. 「オックスカート計画に関する許可範囲外認知」。CIAはA-12のテスト飛行中、民間航空機や軍のパイロットがA-12を目撃していないか確かめるため、航空交通における会話を傍受するシステムも整えていた。
- p. 268 **警戒心を募らせた**…Col. Redmond White, Diary Notes, September 27, 1963, Secret. CIAの副長官だったレッドモンド・ホワイト大佐は覚書で〈アヴィエーション・ウィーク〉の発覚にも言及しており、CIAのジョン・マコーン長官が「オックスカートは遅かれ早かれ明るみに出る」と語ったとするメモも残されている。
三機の空軍版改造機…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 33.
- p. 269 **偵察爆撃**…ユージー・ザッカー空軍長官からバーナード・シュライヴァー大將に宛てられた覚書。1963年4月8日付け。Memorandum, Secretary of the Air Force Eugene Zuckert to General Bernard Schriever, April 8, 1963, w/att:Procurement and Security Provisions for the R-12 Program, Top Secret.
八〇〇万ドル…Marcelle Size Knaack, *Encyclopedia of U.S. Air Force Aircraft and Missile Systems, Post-World War II Bombers*, 559. XB-70Aはボーイング・エアクラフト社のMX-2145計画に端を発していた。以下を参照。Ball, *Politics and Force Levels*, 216-18.
- p. 270 **ケネディは驚きを禁じえなかった**…Rich, *Skunk Works*, 228. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)
不必要で経済的に不合理…ケネディ大統領による緊急の国家的必要に関する特別覚書。1961年5月25日、上下両院合同会議で発表された。
B - 70の注文数…House Armed Services Committee, Authorizing Appropriations for Aircraft, Missiles and Naval Vessels for the Armed Forces (1961), 569, see FY 1962, 1564-65, 1577.
約束してくれるかね…Rich, *Skunk Works*, 231. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)
空軍からロッキード社に送らせる…Robarge, *Archangel*, 52. 空軍は当初、ソ連で進行中と噂される超音速爆撃機を迎撃するために設計されたYF-12、100機を想定していた。
- p. 271 **エンジンが届く**…Robarge, *Archangel*, 17. プラット・アンド・ホイットニー社のジョン・エヴァンスに取材。J-57エンジンの最高速度はマッハ1.6、最高高度は12キロだった。
ペンのような影…エドワード・ロヴィックに取材。
- p. 272 **日ごと出てくる問題**…Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 38.
- p. 273 **F - 101が滑走路からはずれ**…ドナルド・ドノヒューに取材。
- p. 274 **最高司令官に就任して**…CIA Memo, Meeting with the President, Secretary Rusk, Secretary McNamara, Mr. Bundy and DCI. Re: Surfacing the OXCART, 29 November, 1963, 1.

第12章 さらに隠蔽

ジム・フリードマン、スレーター大佐、T・D・バーンズ、スタントン・フリードマンに取材。

- p. 275 **エリア22**…ジム・フリードマンに取材。現代の地図では、エリア22はマーキュリー基地の南側にある。1950年代と60年代は、多くの区画がちがう番号を割り振られていたようである。

一九六二年四月三〇日…Priority Secret Classified Message to Director from—
2219Z Classified Message Secret 15 May 62, ZE19C “Oxcart Secure Ops.”

- p. 276 **海拔およそ一〇万八〇〇〇メートル**…Jenkins, *Hypersonics Before the Shuttle*, 119.
地球の大気圏と宇宙空間の境界線として定義されるカーマン・ラインは海拔100キロの高度に位置する。U-2の飛行高度はおよそ21キロ、A-12はおよそ28キロだった。

- p. 277 **民間航空会社のパイロット**…スレーター大佐に取材。: Annie Jacobsen, “The Road to Area 51,” *Los Angeles Times Magazine*, April 5, 2009, 26-28, 77.

ウォルター・クロンカイト…以下よりオンラインで視聴可能。“From the Vault,” *CBS Reports*.

- p. 278 **〈CBSレポート〉に出演**…Haines, “CIA’ s Role,” 74.

UFOに関する公聴会… “Congress Reassured on Space Visits,” *New York Times*, April 6, 1966.

ジェラルド・ヘインズ…Haines, “CIA’ s Role.”

- p. 279 **ジョン・リア**…Lear, “The Disputed CIA Document on UFO’ s,” *Saturday Review*, September 3, 1966.

- p. 283 **謎めいた人物**…ヒレンケッターは、1947年の国家安全保障法がまだ交渉の段階にあった1947年5月1日にCIA長官に就任した。そのため、CIAが発足した1947年9月18日の時点ですでに長官の立場にあった。

UFO研究者グループの理事…Haines, “CIA’ s Role,” 74.

議会で証言… “Air Force Order on ‘Saucers’ Cited; Pamphlet by the Inspector General Called Objects a ‘Serious Business,’ ” *New York Times*, February 28, 1960.

- p. 284 **不可解な辞め方**…NICAP Web site, “The Who Was Series,” Hillenkoetter, Vice-Admiral Roscoe, <http://www.nicap.org/photobio.htm> スタントン・フリードマンとのインタビューで彼は、ヒレンケッターが辞めたことに不可解な点はないと答えている。「ただ辞めたただけだ」と。またフリードマンは、ヒレンケッターが情報を集めるために空中現象調査委員会に在籍していたとも考えていない。

ほんとうの役割…Ibid. 空中現象調査委員会がまとめたヒレンケッターの公式の伝記には次のように書かれている。「彼は1962年2月に空中現象調査委員会を辞めた。そして、CIAの元高官——初代政治戦・心理戦主任を務めたジョセフ・ブライアン3世が、代わりに委員会の幹部委員に就任した（ブライアンはCIAの経歴について空中現象調査委員会に明かしていない）」。

三つの考え…Memorandum for file OSI, Meeting of OSI Advisory Group on UFO, January 14 through 17, 1953, 3 pages; Scientific Advisory Panel on Unidentified Flying Objects, 14-17 January 1953, Evidence Presented, 2 pages; CIA Scientific Advisory Panel on Unidentified Flying Objects, Comments and Suggestions of UFO Panel, 19 pages. 未確認飛行物体に関するCIAの公式見解は、ベデル・スミス長官の在任中に彼によって確立され、この新しい考えが出はじめる1966年頃まで維持された。

この仮説…CIA Memo, Translation, Vitolniyek, R. (Director) Flying phenomena,

Sovetskaya Latvija, no. 287, 10 Dec. 67; CIA Memo, 10 Aug. 67, “Report on Conversations with Soviet Scientists on Subject of Unidentified Flying Objects in the USSR”; CIA Memo, Translation of Memo from *Komsomol'skaya pravda*, no. 13, 20 January 68, author Zigel, 3.

- p. 285 **ヴィレン・リュスティベルグ**…CIA Memo, Translation, Lyustiberg V. (Science commentator for [illegible]), “Are Flying Saucers a Myth?” *Pravda, Ukrainy*, no. 40, 17 Feb. 68.

注意を失政や侵略からそらす…CIA Memo, Translation, “Nothing But the Facts on UFOs or Which Novosti Writer Do You Read?” 9 April 1968, 12 pages.

フェリックス・ジゲル博士…CIAはジゲルを密に観察していた。彼に関するCIAの伝記には「ジゲル・F・博士は1969年現在、モスクワ航空大学の准教授の後援を受けて書いている」と記されている。ジゲルはカザフスタンで日食を観測する調査に参加したのち、1936年、天文学と数学への興味からUFOに対する興味も持ちはじめたことをCIAの分析官は発見している。彼は、1908年に彗星が爆発してできたと見られるシベリアのツングースカのクレーターも訪れている。この爆発により、およそ8000万本の木がなぎ倒され、シベリアの森林2150平方キロが焼失したのだが、ジゲルは1960年代初め、このクレーターは宇宙の乗り物が墜落してできたものかもしれないと言って同僚を驚かせている。

全連邦航空宇宙委員会のUFO部門…Title: Unidentified flying objects, Source: *Soviet Life*, no. 2 1968, 27-29, 1.

- p. 286 **UFOは別世界に由来するという仮説**…Ibid.

第13章 汚くて退屈で危険な任務は無人偵察機に

ケネス・コリンズ、チャールズ・E・トラップ、スレーター大佐、華錫鈞、エドワード・ロヴィック、葉常棣（書面でのやりとり）、ハーヴィ・ストックマンに取材。

- p. 287 **自分に与えられる試練**…ケネス・コリンズに取材。

- p. 288 **ジャングルでのサバイバル**…ケネス・コリンズ、チャールズ・E・トラップに取材。

- p. 290 **葉常棣という**…Hua, *Lost Black Cats*, ix.

黒猫中隊…Ibid., viii-x.

いっさい公開されなかった…華錫鈞に取材。

暗号名を“テリー・リー”と…スレーター大佐に取材。葉常棣のアメリカ名はロビン・イエ。

- p. 291 **中国の核施設**…National Photographic Interpretation Center, Mission [GRC-169], 23 August 1963, 30 pages. こうした任務はチャーチ・ドア作戦と呼ばれるものだった。黒猫中隊が撮影した偵察対象は、ロプノールの核施設のほか、ミサイル発射基地、飛行場、港、工業地帯などである。

拷問を受け…華錫鈞に取材。CIAが支援した黒猫中隊の元U-2パイロット、華錫鈞は、自身の著作 *Lost Black Cats* のなかで、葉常棣と張立義とのインタビューをもとに、ふたりが共産党支配下の中国で捕虜としておくれた19年にわたる苦難を語っている。葉と張が払った犠牲は、CIAに認められることはなかった。CIAは1998年9月17日、CIAが主導したU-2作戦の多くが機密解除されたことを記念して「U-2—諜報活動における革命」と題したシンポジウムを開催し、それらの作戦の成功を称えたが、著者による華とのインタビューによれば、そのシンポジウムでは黒猫中隊のU-2パイロットの名

前に触れられることはいっさいなかったという。

張立義という…Ibid., ix. 華によれば、張立義のアメリカ名はジャック・チャン。

「汚い」「退屈」「危険」…T・D・バーンズに取材。

- p. 293 **海上に引き返す**…エドワード・ロヴィックに取材。「私はマイク・アッシュという同僚とともに、回収用の無線標識信号を送信するためのアンテナを選択できるよう、無人機のパレットに電気回路を組み込む設計をした。センサーのユニットが、待機していた航空機によって回収されず、海中に沈んだ場合には、アンテナを作動させて無線信号を送信し、回収できる仕組みにした」センサーのユニットが逆さまになった状態で着水した場合に備えて、ロヴィックとアッシュは海水によって第2のアンテナを作動させるシステムを作った。

ユルタイド…スレーター大佐、フランク・マリーに取材。

- p. 294 **崖から落下しそうに**…チャールズ・E・トラップに取材。
- p. 296 **レイ・トリック**…トリックがなぜ、どのように死亡したのかについては諸説あるが、著者はスレーター大佐の見解を支持する。無人機D-21の最初の正式な発射テストは1966年3月5日におこなわれ、マッハ3.2で飛行中の母機背面からの発射に成功した。無人機は約190キロ飛行したところで燃料が切れ、計画どおり、海に墜落した。その1カ月後、2度目の発射テストでは、無人機は約3500キロをマッハ3.3で飛行したのち、海中に沈んだ。悲劇が起き、トリックが死亡したのは、3度目の発射テストだった。
- 感情に動かされるまま**…Rich, *Skunk Works*, 267. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)

- p. 297 **ゲイリー・パワーズのときのような状況**…Ibid.

ベン、これが何かわかるかい?…Ibid., 270.

- p. 298 **アフロディーテ作戦**…Singer, *Wired for War*, 48.

- p. 299 **テスラの無人ボート**…Tesla, “Inside the Lab-Remote Control,” PBS, http://www.pbs.org/tesla/ins/lab_remotec.html.

約六〇キロの爆薬を搭載…“Rise of the Machines,” ArmyTechnology.com, May 21, 2008, <http://www.army-technology.com/features/feature1951/>.

- p. 300 **マーマレード**…AFSC History Staff, *History of Air Force Atomic Cloud Sampling* 9. **一八メートル上空**…Ibid., 11.

サンドストーン作戦…空軍にとって、無人機航空団の維持は、費用が高くついたらばかりでなく、安全保障上のリスクをはらむものだった。1947年初頭、さらなる原爆実験計画が国家機密として厳重に秘匿されたのは、アメリカが原爆を禁止する——そうでなければ、せめて原子力を国連の管理下に置く——ことを国が真剣に考えていると世論を誘導するためだった。しかし実際には、国際的な議論がおこなわれているとされたこの時期に、太平洋における次の連続原爆実験に向けて、無人機部隊が任務復帰のために再招集されていたのだった。クロスロード作戦は単独と見なされていたから、無人機の操縦士のあいだでは、復帰が意味することはただひとつ、さらなる核実験が控えているという噂が浮上した。このような噂は、命令系統の上層部にも伝わった。

キノコ雲を突っ切って…AFSC History Staff, *History of Air Force Atomic Cloud Sampling*, 21.

- p. 301 **世界全体の大気圏が**…アル・オドネルとジム・フリードマンに取材。

- p. 302 **オープンハイマーの身に起きたこと**…アル・オドネルに取材。

爆発と爆風の威力を測定…これらの新型無人機はT-33練習機を改良したもので、第3.4任務群と呼ばれ、フロリダ州エグリン空軍基地を拠点としていた。これに対し、以前の実験では旧型のTF-80機が使用されていた。

無人島に不時着…AFSC History Staff, *History of Air Force Atomic Cloud*

Sampling, 37.

- p. 303 **パイロットの一団**…Ibid., 82. ハーヴィー (Hervey) のスペルが誤ってHarveyになっている。

サンプル採取…Ibid., 80-85. ハーヴィー・ストックマンに取材。

コックピットにサルを乗せて… “Conversations with Colonel Hervey S.

Stockman,” edited by Ann Paden and Earl Haney (not published), from a section called “Nuclear testing program.”

モルモットになるわけではない…AFSC History Staff, *History of Air Force Atomic Cloud Sampling*, 66.

当時の私は… “Conversations with Colonel Hervey S. Stockman,” edited by Ann Paden and Earl Haney (not published), from a section called “Pacific testing ground.”

- p. 304 **ジミー・P・ロビンソン**…ロビンソンの身の上に起きたことに関する詳細は、本書中の引用箇所を含め、以下に記載。AFSC History Staff, *History of Air Force Atomic Cloud Sampling*, 69-75. 同研究論文中のロビンソンの名前は、その上に「プライバシー法にかかわる情報につき削除」というスタンプが押され、消されている。ロビンソンの名前が初めて公表されたのは、2009年、マーク・ウォルヴァートンが〈エア・アンド・スペース〉誌に寄せた「キノコ雲のなかへ」という記事でのことである。ロビンソンは死後1年ほどしてから空軍殊勲十字章を授与されているが、遺族は本当の死亡理由を知らされずにいた。ウォルヴァートンはこう書いている——ロビンソンの娘レベッカは「父親が亡くなったときにはまだ赤ん坊だった。彼女は父親の最後の任務について詳しい情報を公開するよう、何年にもわたって政府に嘆願したが、結局限られた情報しか入手できなかった」レベッカ・ロビンソンによれば、父親の死に関する情報の大部分は「依然として機密扱い」となっているという。

- p. 305 **原子サンプル採取**…AFSC History Staff, *History of Air Force Atomic Cloud Sampling*, 101.

- p. 306 **でかすぎる爆弾**…アル・オドネルに取材。

広島に投下された原爆…Rhodes, *Dark Sun*, photograph #76, “Mike over Manhattan.”

(リチャード・ローズ『原爆から水爆へ——東西冷戦の知られざる内幕』紀伊國屋書店／小沢千重子、神沼二真訳) アイヴィ作戦のマイク実験の火球が長崎規模の爆弾と比較されている。マイクの柱は直径約32キロ、キノコ雲の部分は高度約15200メートルから始まっており、これは民間航空機の飛行高度のおよそ2倍の高さだった。キノコ雲の頂上は対流圏にまで達し、その幅は約320キロに及んだ。

第14章 砂漠のドラマ

スレーター大佐、バッド・ウィーロン博士、ケネス・コリンズ、ケネス・スワンソン、フランク・マリー、チャールズ・E・トラップ、トニー・ベヴァクア、ロバート・B・アベルナシー博士に取材。

- p. 307 **隠れ場所**…Woods, *LBJ*, 313.

冗談じゃない…Brzezinski, *Red Moon Rising*, 175. (マシュー・ブレジンスキー『レッドムーン・ショック——スプートニクと宇宙時代のはじまり』NHK出版／野中香方子訳)

- p. 308 **爆弾を投下する**…Dickson, *Sputnik*, 117.

パニックを惹き起こす…Korda, *Ike*, 700.

実際に見たのは…Brzezinski, *Red Moon Rising*, 176. (マッシュー・ブレジンスキー『レッドムーン・ショック——スプートニクと宇宙時代のはじまり』NHK出版／野中香方子訳)

- p. 309 **大統領執務室で**…CIA Memo, Meeting with the President, Secretary Rusk, Secretary McNamara, Mr. Bundy and DCI. Re: Surfacing the OXCART, 29 November, 1963, 1.

- p. 310 **航空記録を保持**…T・D・バーンズはこう説明している。「公式には、SR - 71ブラックバードが今でも水平飛行における持続飛行の世界速度記録を保持しているが、ブラックバード関係者のあいだではA - 12オックスカートのほうが速く高く飛行できたことはよく知られている。SR - 71は乗員をふたりにした分、ハンデがあったからだ。SR - 71が“記録”を保持しているのは、A - 12の記録が認定されていないせいだ。空軍が記録を樹立したときには、A - 12は存在していなかったから」

オックスカートの存在を公表…国民がオックスカートの存在を知ることになれば、秘密にしておく必要のあるプログラムの指揮をCIAに任せる理由がなくなる。空軍は、CIAがオックスカートの実運用化に向けた準備をすべて終えていることを承知していた。だから今こそ、CIAを協へ押しやるべき時期なのだと空軍は考えた。これは1955年にカーティス・ルメイ将軍がU-2計画について「(CIAに) 開発させて、われわれが奪う」(Brugioni, *Eyeball to Eyeball*, 24)と目論んだときに起きたことの繰り返しである。

秘密の提案書…Letter, General Bernard Schriever to Eugene M. Zuckert, July 11, 1963, Top Secret.

- p. 311 **別の角度から**…CIA Memo, Meeting with the President, Re: Surfacing the OXCART, 29 November, 1963, 1. 「CIAと空軍の偵察機(15機)の開発には7億ドルを要するが、そのうちの4億ドルはすでに使われている」この数字には、プラット・アンド・ホイットニー社が開発した偵察機の「比類なきエンジン」に要した費用は含まれていない。コストに関しては、ロッキード社のスカunk・ワークスで責任者を務めたベン・リッチ(1975～1991年に同職)は、「CIAは6億ドルという莫大な開発コストを不承不承認めた」と記している。

架空の名称A - 11…Parangosky, *The Oxcart Story*, 4. 「大統領が“A - 11”と言ったのはもちろん意図的なものだった。A - 11は、ロッキード社が最初に提案した全金属航空機用の当初の設計番号だったが、その後、空軍のYF - 12A迎撃機の設計番号になった。YF - 12Aとその基礎となったA - 12との最大のちがいは、空対空ミサイルを発射できるよう、ふたり目の乗員をのせることにあった。A - 11とA - 12の区別を保てるよう、安全保障担当は差し迫った発表について政府と産業界のほぼすべての関係者に事情を説明していた。こうしてA - 12オックスカートの存在は公になることはなかった。A - 11の開発にCIAが関与しているとの憶測が飛び交ったが、政府がそれを認めることはなかった」

航空機速度の世界記録…Public Papers of Presidents of the United States, Lyndon B. Johnson, 1963-1964, 1:322-23.

ずぶ濡れの状態…スレーター大佐に取材。

- p. 312 **あの件を知られないように**…Summary of Meeting with Secretary McNamara and Secretary Gilpatric, General Carter and Mr. McCone on 5 July 1962. DCI Records dated 6 July 1962.

- p. 313 **スカイラーク作戦**…Carter Memorandum to Wheelon, “SKYLARK,” 22 Aug. 1964.

- p. 314 **コリンズに言わせれば**…ケネス・コリンズに取材。

J - 58ターボジェット・エンジン…ロバート・B・アベルナシー博士に取材。
Robarge, *Archangel*, 12-13.

- p. 316 **作業中の男性ふたり**…Rich, *Skunk Works*, 221. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機

——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)

小さな黒点…Ibid., 223. 同書のノーム・ネルソンの談話より。ネルソンはオックスカート計画中にCIAとロッキード社スカンク・ワークスの連絡窓口を務めた。

- p. 317 **気を失いそうに**…ケネス・コリンズに取材。

辛抱強く待って…Ibid.

直してくれ…Rich, *Skunk Works*, 221. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳) この話については、ケネス・コリンズからも詳しく事情を聞くことができた。

- p. 319 **ここから出してくれ!**…Rich, *Skunk Works*, 227. (ベン・R・リッチ『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳)

- p. 320 **プロジェクト・ケンプスター・ラクロワ**…エドワード・ロヴィックに取材。Pedlow and Welzenbach, *Central Intelligence Agency*, 42.

- p. 321 **二八六発の核爆弾**…ハードタック作戦では119回の地上実験がおこなわれた。実験は1961年9月15日に再開され、ネリス空軍射撃場(訳注:2001年よりネリス試験訓練場に改称)での4回を含め、1964年末までにネヴァダ核実験場での地下実験は167回に及んだ。

- p. 322 **最初の電波妨害システム**…ケネス・スワンソンに取材。

- p. 323 **興味を惹かれる**…チャールズ・E・トラップに取材。

- p. 328 **レッドフォード准将**…本書のレッドフォード准将の人物像は、空軍が公開している彼の略歴のほか、バッド・ウィーロン博士、スレーター大佐、フランク・マリーら、彼をよく知る人物とのインタビューをもとにしている。

尻込みをするような性格ではなかった…スレーター大佐に取材。

- p. 331 **二〇〇五年になって**…Weiner, *Legacy of Ashes*, 276-80. (ティム・ワイナー『CIA秘録——その誕生から今日まで』文藝春秋／藤田博司、山田侑平、佐藤信行訳)

一八〇度転換…Robarge, *Archangel*, 31.

地对空ミサイルシステムの供与…Helms Memorandum to the 303 Committee, OXCART Reconnaissance of North Vietnam, with Attachment, 15 May 1967.

ハノイ周辺に…トニー・ベヴァクアに取材。同氏の個人所有の写真も参考にした。

第15章 究極の男社会

ケネス・コリンズ、スレーター大佐、フランク・マリー、フレッド・ホワイト、チャールズ・E・トラップ、ウィリアム・"ビル"・ウィーヴァー、レイモンド・L・ホプト准将に取材。

- p. 332 **ベッドから叩き起こされる**…ケネス・コリンズに取材。核実験の一時停止が決まったため、1958年10月30日におこなわれたチタニアの爆発実験が、3年近くに及んだネヴァダ核実験場での最後の核実験になった。1961年8月、ソ連は実験の再開を発表し、その後3カ月間にわたって31回の核実験を実施した。そのひとつが、核威力50メガトンという史上最大の水素爆弾ツァーリ・ボンバだった。それを受けて、ケネディ大統領は原子力委員会にネヴァダ核実験場での実験再開を命じた(アル・オドネルに取材)。

- p. 334 **この件について**…ケネス・コリンズに取材。

- p. 335 **知らなければ知らないほど**…これは、著者がインタビューしたCIAと空軍のパイロット全員が共有していた心情である。

- p. 336 **ラジオはなく**…スレーター大佐、フランク・マリー、ケネス・コリンズに取材。

まるで夢魔のようだ…Helms, *A Look Over My Shoulder*, 309.

- p. 337 **偵察活動における唯一の罪**…David Robarge, “Richard Helms.”
戦略諜報局に採用され…Helms, *A Look Over My Shoulder*, 31.
- p. 338 **魚介類を調達**…スレーター大佐に取材。
- p. 339 **MKウルトラ**…このテーマについては、元国務省の分析官で情報調査局の局長補佐官を務めたジョン・マークスが権威である。1977年6月、マークスは、MKウルトラの関連資料7箱（現存すると言われる唯一の資料で、主に財務記録）の一部を入手した。彼は著作（*The Search for the Manchurian Candidate*, 219）のなかでヘルムズがCIAを去る直前に「大量の文書とテープの破棄を主導したが、自分に不利な情報としてのちに利用されるおそれのある資料を最小に抑えるのが目的だったのだろう」と記している。
- p. 342 **〈ニューヨーク・タイムズ〉にも掲載**…スレーター大佐による。
スレーターとレッドフォード准将…No. 303 National Security Action Memorandum, June 2, 1964; Top Secret, From the Director of Central Intelligence, Memorandum for the 303 Committee, 22 March 1966.
- p. 343 **故意に遅らせて**…バッド・ウィーロン博士に取材。
- p. 344 **偵察飛行中に撃墜されれば**…CIA Memorandum, “Reactions to a possible US Course of Action,” 17 March 1966; “OXCART Development Summary and Progress,” 1 October 1966–31 December 1966.
反対票が過半数を占め…Robarge, *Archangel*, 33.
三割近く短縮…スレーター大佐に取材。
- p. 345 **アメリカ全土を飛行**…OSA（特殊活動部）技術部門副責任者を務めたジョン・パランゴスキーは、パークの飛行を次のように要約している。「1966年12月21日、ロッキード社のテストパイロット、ビル・パークは、6時間で約16410キロを飛行し、オックスカートの性能を見事に実証してみせた。オックスカートはネヴァダのテスト区域を脱ち、北に向かってイエローストーン国立公園の上空を通過すると、東に針路を変えてノースダコタ州ビスマークへ、さらにミネソタ州ダルースへと飛行した。それから南に向かい、アトランタを経由してフロリダ州タンパに飛ぶと、北西に針路をとってオレゴン州ポートランドへ、そして南西のネヴァダ州へと飛行した。再び東に針路を変え、デンヴァーとセントレイスを通過し、テネシー州のノックスヴィルで旋回すると、メンフィスを通って、ネヴァダに一直線に戻ってきた。この飛行は、ほかのいかなる航空機でも太刀打ちできない無敵の記録を打ち立てた。この飛行を標準的な公務員の1日の勤務にたとえると、公務員がその日の仕事を始めると同時にスタートし、終業時間の2時間前に終了していることになる」全文は、Roadrunners Internationaleオフィシャルウェブサイトを参照。
すばらしいパイロット…スレーター大佐、ウォルト・マリー、ケネス・コリンズ、ロジャー・アンダーセン、チャールズ・E・トラップに取材。
- p. 346 **カボ・サン・ルーカス**…ケネス・コリンズに取材。
燃料計の黒い線…Briefing Memorandum for Acting Deputy Director for Science and Technology, Subject Loss of Oxcart A-12 Aircraft, 6 January 1967.
ヘッドセット・マイクを通して…スレーター大佐に取材。
- p. 347 **脱出します**…スレーター大佐に取材。墜落直後、空軍の通信網は、エドワーズ空軍基地を離陸し、通常の飛行をおこなっていたSR - 71が行方不明になり、ネヴァダに墜落したと思われると伝えている。
離脱できなくなって…Memorandum for Acting Deputy Director for Science and Technology, Subject Loss of Article 125 (Oxcart Aircraft), 25 January 1967, 2.
低空を飛行…ロジャー・アンダーセンに取材。

- 機体を発見したのは…**チャールズ・E・トラップに取材。
- p. 348 **飛行機の操縦は好きかね？**…フランク・マリーに取材。
- p. 349 **ハページにわたる書簡**…Top Secret Idealist/Oxcart, Central Intelligence Agency Office of the Director, BYE-2915-66 Alternative A, 14 December 1966.
- 恥ずべき資産の無駄**…DRAFT, Director of Special Activities, Comments to W. R. Thomas III Memorandum to the Director, BOB, 27 July 1966, 11.
- ゲイリー・パワーズ機撃墜事件**…Ibid., 3.
- 核兵器を管理下に置いていない**…Top Secret Idealist/Oxcart, Central Intelligence Agency Office of the Director, BYE-2915-66 Alternative A, 14 December 1966 4.
- 大統領も彼と同じ見方**…Memorandum for the President, Subject: Advanced Reconnaissance Aircraft, December 26, 1966, Top Secret. 担当者には、サイラス・ヴァンス（国防副長官）、ドナルド・ホーニグ（大統領科学顧問）、C・W・フィッシャー（予算局）、ヘルムズらがいた。ヘルムズ以外の担当者は全員、A-12オックスカートの予備役化を提言した。12月28日、大統領は覚書の提言を承認し、1968年1月までにA-12の段階的廃止を命じた。
- エリア51に戻り**…スレーター大佐に取材。
- p. 350 **二つ星の将官**…Ibid.
- p. 351 **ワーナー・ワイスを訪ね**…Ibid.

第16章 ブラック・シールド作戦と、プエブロ号事件の知られざる歴史

スレーター大佐、ケネス・コリンズ、ロジャー・アンダーセン、ハーヴィー・ストックマン、ピーター・ストックマン、フランク・マリー、ロナルド・"ジャック"・レイトン、ユニス・レイトン、チャールズ・E・トラップに取材。

- p. 355 **情報はあまり役に立たない**…Hathaway and Smith, *Richard Helms*, 2. (ibid., 7) 次のヘルムズのコメントが状況をよく物語っている。「ジョンソン大統領に対しては……最初の60秒か、遅くとも120秒以内には本題にはいらなければだめだという結論に達した。それを逃すと、大統領はボタンを押してコーヒーか清涼飲料水を頼むか、ラスクやマクナマラに話しかけるか、あるいは同席者らに耳打ちを始める。そうすると、私はいちばん聞いてほしい相手を失ってしまうのだから」(Ibid., 7)
- ターゲット・チューズデー**…Barrett, "Doing 'Tuesday Lunch,'" 676- 77.
- p. 356 **こんな提案をする**…OSA（特殊活動部）技術部門副責任者を務めたジョン・パランゴスキーは、次のように要約している。「CIA長官のリチャード・ヘルムズはオックスカートの配備を認めるよう、303委員会に再度正式な申し入れをおこなっている。彼はまた、5月16日の"ターゲット・チューズデー"の昼食会でもこの問題を持ちだし、ついに大統領から承認を得た。ウォルト・ロストウが同日中に大統領の決定を正式に通達し、ブラック・シールド作戦の配備計画は速やかに実行に移された」
- 軍需品四五万四〇〇〇キロ**…Johnson, *History of the Oxcart Program*, 1. 嘉手納に配備される3機のA-12は、グルーム湖を出発し、ノンストップで太平洋を飛行した。彼らは嘉手納に着くまでの6時間弱で2回給油した。スレーター大佐、ケネス・コリンズ、フランク・マリー、ロジャー・アンダーセンに取材。
- 巢立ってこそ、鳥ではないか**…CIA Director of Special Activities to CIA Director of Reconnaissance, "Operation readiness of the OXCART System," 12 November 1965.

- p. 357 **所得の四〇パーセント近く**…CIA NLE MR Case No. 2000-69, Ryukyu Islands (Okinawa) June 1960, 2. 「軍経済が労働人口の13パーセントを雇用し、所得の36パーセントを創出している」
極力めだたない…ケネス・コリンズに取材。
- p. 358 **もっともらしいつくり話**…スレーター大佐に取材。
A - 12オックスカート初の任務…Photographic Interpretation Report:Black Shield Mission X-001, 31 May 1967. NPIC/R-112/67, June 1967.
- p. 359 **収集された写真情報**…OSA（特殊活動部）技術部門副責任者を務めたジョン・パランゴスキーはこう記している。「以前の飛行任務では、撮影されたフィルムはニューヨーク州ロチェスターのイーストマン・コダック社で現像されていたが、夏の終わりになる頃には、日本にある空軍のセンターが現像をおこなうようになっていた。ブラック・シールド作戦の任務完了から24時間以内にヴェトナムのアメリカ軍司令官の手元に写真情報を届けるためだった」
察知され、追跡された…CHESS RUFF TRINE OXCART, BYE-44232/67, Black Shield Reconnaissance Missions 31 May-15 August 1967, 22 Sept. 1967, Central Intelligence Agency, 1. 2007年8月に機密解除。
- p. 360 **ミサイルに狙われる**…Robarge, *Archangel*, 36.
- p. 361 **空中衝突に**…ハーヴィ・ストックマンに取材。以下からも引用。 *Conversations with Hervey Stockman* (not numbered) in a section called “Mid-air collision.”
アメリカ軍パイロット…フランク・マリーに取材。
- p. 362 **連中が何か仕掛けてきて**…Karnow, *Vietnam*, 514.
- p. 363 **偵察任務を帯びた派遣**…CIA Top Secret [Redacted], 24 January 1968, Memorandum: Chronology of Events Concerning the Seizure of the USS *Pueblo*, 8 pages.
ミグ21ジェット戦闘機二機…Ibid., 3.
自らプエブロ号を沈没させる…Bamford, *Body of Secrets*, 259.
- p. 364 **文書の九割**…Ibid., 305.
プエブロ号が拿捕されてから…Department of Defense, Top Secret Memorandum for the Secretary of Defense, January 25, 1968.
- p. 365 **プエブロ号の所在**…TOP SECRET TRINE OXCART, BYE-1330/68 Figure 9. ウィークスの飛行地図については以下を参照。Mission BX-6847, 26 January 1968, figure 5.
それについては…フランク・マリー、ケネス・コリンズに取材。
ほんのひと握りしか…実は、フランク・マリーは40年間、プエブロ号の所在を突き止めたのは自分だと思い込んでいたのだが、それはCIAにそう言われたからだった。ジャック・ウィークスがプエブロ号事件で果たした本当の役割が明らかになったのは、CIAがオックスカート計画に関する正式文書を機密解除した2007年になってからのことである。マリーのそのほかの任務については依然として機密扱いとなっている。
- p. 366 **空爆計画を打ち切る**…Rich, *Skunk Works*, 44. ベン・R・リッチ（『ステルス戦闘機——スカンク・ワークスの秘密』講談社／増田興司訳）同書のウォルト・ロストウによって書かれた項目より。ロストウは1966年から1968年にかけて、ジョンソン政権の国家安全保障問題担当大統領特別補佐官を務めた。
北朝鮮上空での偵察任務…TOP SECRET TRINE OXCART, BYE-1330/68 figure 7. Mission BX-6853, 19 February 1968.
ある連邦裁判所判事が…Wilber, “Hell Hath a Jury.”
- p. 367 **美しい夕陽**…ケネス・コリンズに取材。
- p. 368 **合計二九回の飛行任務**…Robarge, *Archangel*, 35. パイロットたちは、合計58回の飛行任務をおこなうよう伝えられていた。29回のうち、北ヴェトナム上空が24回、カンボ

ジア、ラオス、非武装地帯上空が合わせて2回、北朝鮮上空が3回だった。

電波妨害システムを利用して…フランク・マリーに取材。国防総省は、空軍による空爆の潜在的標的を特定するためにもオックスカートが撮影した写真を利用した。以下を参照。TOP SECRET CHESS RUFF TRINE Oxcart BYE-44232/67.

ブラックバードが嘉手納に到着…ケネス・コリンズとトニー・ベヴァクアに取材。

SR-71は1968年3月より到着した。

- p. 369 **A - 12計画の終了…**Helms Memorandum to Paul Nitze (DOD) and Horning, “Considerations Affecting OXCART Program Phase Out,” 18 April 1968.

ウィークスが体調を崩し…ケネス・コリンズに取材。

- p. 370 **グルーム湖を離れたあと…**トニー・ベヴァクアに取材。

一九六八年七月二六日の飛行…SR - 71がSA - 2から攻撃を受けたのはこれが初めてだった。ベヴァクアとともに同機に搭乗し、後席にいたのは偵察システム担当のジェリー・クルーだった。以下を参照。www.blackbirds.net/sr71/sr-crew-photos/ (2010年12月29日にアクセス)

- p. 371 **第一一二九特殊活動飛行隊の終焉…**オックスカート計画は、1957年に作成されたA - 1と呼ばれる図面から始まり、1968年6月に終わりを迎えるまでの10年あまりにわたって継続された。ロッキード社はA - 12オックスカート15機、YF - 12A 3機、SR - 71ブラックバード31機を製造した。CIAのジョン・パラングスキーはこう要約している。「49機の超音速航空機が7300回を超える飛行をおこない、17000時間にわたって空を飛んだ。そのうち2400時間は速度マッハ3超の飛行だった。5機のオックスカートが事故で失われ、パイロット2名が死亡、2名が九死に一生を得た。これに加えて、2機のF - 101追尾機が空軍パイロットとともにオックスカートのテスト段階で失われている」

特別式典…ケネス・コリンズ、フランク・マリー、スレーター大佐、ロナルド・"ジャック"・レイトンに取材。ケネス・S・コリンズ、ロナルド・J・レイトン、フランシス・J・マリー、デニス・B・サリヴァン、メル・ヴォヴォディッチは、勇敢な功績を称えるCIAインテリジェンス・スター勲章を、CIA次官のルーファス・L・テイラー中將から授与された。ジャック・W・ウィークスの勲章は、未亡人となったシャーリーン・ウィークスが受け取っている。ヒュー・スレーター大佐とその副官を務めたメイナード・N・アムンドソン大佐には空軍勲功章が贈られた。

- p. 372 **それぞれの道を進んだ…**ケネス・コリンズ、スレーター大佐、フランク・マリー、チャールズ・E・トラップ、ロジャー・アンダーセンに取材。

第17章 エリア51のミグ

T・D・バーンズ、ドリス・バーンズ、トニー・ランディス、ピーター・メルリン、スレーター大佐、フランク・マリー、ロジャー・アンダーセン、グレース・ワイスマン（ジョー・ウォーカーの未亡人）に取材。

- p. 375 **ムニル・レドファ…**Uzi Mahnaimi, “Stolen Iraqi Jet Helped Israel Win Six-Day War,” *Sunday Times of London*, June 3, 2007.

すぐに引き返せ…Geller, *Inside the Israeli Secret Service*. 第3章のソ連のミグに関する情報を使用。

- p. 376 **トルコ上空を飛び…**Obituary, “Major-General Meir Amit,” *Telegraph*, July 22, 2009.

イスラエル空軍上層部をまえに…Ibid.

- p. 377 **ジェームズ・ジーザス・アングルトン**…Helms, *A Look Over My Shoulder*, 275. 「イスラエル国内におけるジムの影響力は計り知れないものがあつた。私の知るかぎり、外国の諜報員のために記念碑を建てたのはイスラエルだけだ。アングルトンはFBIとの連絡役として、モサドに貢献した。アングルトンにとって最大の成功となったこの任務については、いまだに機密扱いとなっているし、そうありつづけるべきだと思う」
最も謎が多く…著者はヴァージニア州ラングレーのCIA本部、スパイ博物館を訪問。
鏡の荒野…Helms, *A Look Over My Shoulder*, 277. このフレーズはアングルトンの代名詞となっており、中国の関係は実際には断絶していない、という彼の考えもここから来ている。「中ソの対立がソヴィエトのつくり出したまやかしだとするアングルトンの考えは興味深い、が、事実是这样ではない」
- p. 378 **X - 2に所属**…Ibid., chapter 28, “Beyond X-2.”
ヘルムズの評判が確立…Weiner, *Legacy of Ashes*, 319.
- p. 379 **ニュースにならなかった**…スレーター大佐、フランク・マリー、T・D・バーンズに取材。
- p. 380 **地元の新聞の求人欄**…ドリス・バーンズに取材。
- p. 381 **奇妙な町**…1960年代のビーティに関する詳細はT・D・バーンズとドリス・バーンズに取材。
- p. 382 **パパの宇宙船！**…バーンズのふたりの娘（匿名を希望）に取材。
- p. 383 **緊急着陸できるよう**…ピーター・メルリンに取材。Barnes, “NASA X-15 Program,” 1.
- p. 385 **バーンズは無線を使い**…X-15の飛行に関する日付とデータは以下を参照。
Jenkins, *Hypersonics Before the Shuttle*. 処分されたテープの話はバーンズから聴取。
- p. 387 **最悪の衝突事故**…バーンズが語ったとおりの記述。別の報告は以下を参照。Donald Mallick’s *The Smell of Kerosene*, 132-35. マリックはウォーカーの墜落現場に派遣されたヘリコプターの乗員だった人物。
- p. 390 **ミグのリバース・エンジニアリング**…T・D・バーンズに取材。
- p. 391 **ミグのテスト飛行**…Barnes, “Exploitation of MiGs at Area 51, Project Have Doughnut, http://area51specialprojects.com/migs_area51.html; Tolip, “Black Ops: American Pilots Flying Russian Aircraft During the Cold War,” MilitaryHeat.com, October 4, 2007.
- p. 395 **「トップガン」を生んだ**…T・D・バーンズに取材。
天秤の傾きが変わった…Wilcox, *Scream of Eagles*, 76-77.

第18章 メルトダウン

リチャード・ミンガス、T・D・バーンズ、トロイ・ウェイド、ダーウィン・モーガン、ミルトン・M・クライン、ハロルド・B・フィンガーに取材。

- p. 396 **影響を調べる**…Atomic Energy Commission, Summary of Project 57, the first safety test of Operation Plumbbob, report to the General Manager by the Director, Division of Military Application, Objective, 24.
- p. 398 **水素爆弾四発を搭載した**…“Palomares Summary Report,” Kirtland Air Force Base, New Mexico: Field Command Defense Nuclear Agency Technology and Analysis Directorate, January 15, 1975.

SACの爆撃機…1957年、ルメイは空軍の副参謀総長になったことで、戦略空軍を去る。1665機の爆撃機、68の基地、22万4014人の部下が残され、トーマス・S・パワーズがあとを継いだ。

地獄が突然その蓋を開けたようだった…Ron Hayes, “H-bomb Incident Crippled Pilot’s Career,” *Palm Beach Post*, January 17, 2007.

プルトニウムが空気中に洩れ出し…Gordon Dunning, “Protective and Remedial Measures Taken Following Three Incidents of Fallout,” United States Atomic Energy Commission, 1968. 原典はスイスのインターラーケンで1968年5月におこなわれた国際機関シンポジウムのスピーチによる。以下を参照。“Radiation Protection of the Public in Large Scale Nuclear Disaster”.

- p. 399 **ジョンソン大統領**…Moran, *Day We Lost the H-Bomb*, 36.

公式の原子力災害対応班…Memo, Secret, United States Atomic Energy Commission No. 234505, “Responsibility for Search and Rescue Operations,” to M. E. Gates, Manager, Nevada Operations, November 19, 1974.

- p. 400 **除染作業にあたる**…Nuclear Weapon Accident Response Procedures (NARP) Manual, Assistant to the Secretary of Defense (Atomic Energy), September 1990, xii.

見当もつかない場所…Schwartz, *Atomic Audit*, 408.

水爆がなくなったとは聞いていない…Anthony Lake, “Lying Around Washington,” *Foreign Policy*, no. 2 (Spring 1971): 93. 海軍の軍艦38隻が爆弾の捜索にあたった。最終的に爆弾は沖合8キロ、水深870メートルの地点でアルヴィンと呼ばれる潜水艇によって発見された。

グリーンランド上空を飛んでいた…この一節に書かれている事実の多くは、以下の参考文献より借用した。SAC History Staff, *Project Crested Ice*, SECRET/RESTRICTED DATA, SPECIAL HANDLING REQUIRED, AFR 127-4: FOIA 89-107 OAS-)1793.

- p. 401 **第二の火災**…ロスアラモス国立研究所によると、爆発により形成された雲は「高さ850メートル、幅800メートル、奥行き800メートルで、風下にプルトニウムが飛散したことは疑いようがない」

水中に落下…Gordon Corea, “Mystery of Lost US Nuclear Bomb,” *BBC News*, November 10, 2008.

日常的なメンテナンス作業…SAC History Staff, *Project Crested Ice*, 28.

- p. 402 **放射性物質が堆積**…Rollins, “Nevada Test Site—Site Description,” Table 2-4.

「遠隔検知」という技術…Department of Energy Fact Sheet DOE/NV #1140. 遠隔検知研究所は放射能雲サンプリングプロジェクトの一環として1950年代に設立された。この分野に関する情報はほとんど公開されていない。以下を参照。

http://www.nv.doe.gov/library/factsheets/DOENV_1140.pdf.

EG&G遠隔検知研究所…エネルギー省との契約（DE-AC03-93NV11265）のもとに、EG&Gエネルギー・メジャーメント社がこの研究施設を管理運営していた。1996年1月1日には、ベッチェル・ネヴァダ・コーポレーションがエネルギー省管理運営契約（DE-AC08-96NV11718）のもと、この研究・生産施設を運営するようになった。

- p. 403 **政府から請け負って**…この市場は非常に巨大なものとなる。将来の原子力事故に加え、太平洋核実験場のあらゆる場所での、膨大な量の検知作業があったからだ。1946年から1958年にかけて、原子力委員会は太平洋で40発の原子爆弾を炸裂させていた。このなかには、合衆国が起爆した最大の熱核爆弾「キャッスル・ブラボー（15メガトン。広島に投下された原爆の1000倍の威力）」も含まれていた。1971年6月、EG&Gのクルーが「除染の事前調査のため」にエニウェトク環礁に派遣される。放射能検知器を使った調査により——最後の爆発から13年が経過していたにもかかわらず——環礁の水

中、空気中に生物は居住できないと結論づけられた。除染作業には数十年の年月、莫大なコスト、多数の請負い業者の手が必要になり、その指揮はEG&Gが執ることになるだろう。

放射線の測定…アル・オドネル、ジム・フリードマンに取材。Eniwetok Precleanup Survey Soil and Terrestrial, Radiation Survey (Lynch, Gudiksen and Jones) No. 44878; draft revised 5/14/73.

EG&G本社…ミーガン・スタフォードに取材。EG&G/URS public relations, Sard Verbinen & Co., July 16, 2010.

クリントン大統領…EG&Gのエンジニアに取材。EG&Gエネルギー・メジャーメント社は兵器実験で飛散した放射能の測定に重要な役割を果たした。同社にはこうした測定の記録のほか、1960年代のネヴァダ空中追跡システムに関する報告も保管されており、24000の機密文書、フィルム、ビューグラフなどが自社開発のコンピューター目録に収納されている。同社は現在、将来の調査活動に適した形にアーカイブを編成しておしており、1986年にはじまった廃棄手続きは中断されている。コンピューター目録には、上空の実験プログラムで生じた放射性降下物の記録も含まれている。その他の研究文書、フィルム、ノートなど、EG&Gエネルギー・メジャーメント社が大気中の放射能測定時に取った記録（放射能雲の追跡報告、地図を含む）は今後も同社が保管していくものと思われる。機密情報管理室（CMC）には、1960年代の空中追跡システムや実験プログラムに関する多数の報告が保管されている。また、同社には1971年以前の調査データ原本も保管されているが、目録化はされておらず、これらの記録をデータベース化する資金を集めようという動きがある。

p. 404 **「情報適格性」がない**…EG&Gのエンジニアに取材。

たった一行だけ…*Advisory Committee on Human Radiation Experiments Final Report*, 506-507.

エリア51のドッペルゲンガー…1955年から13年間、グルーム湖では航空偵察技術の向上を目的としたCIAと空軍の偵察機プログラムがおこなわれていた。そこから南西約64キロの地点にあるジャッカス・フラッツでも1955年ごろから17年間、人類の火星到達を目的とした原子力委員会、NASA、国防総省の原子力ロケットプログラムがおこなわれていた。とはいえ、両者のあいだには興味深いパラドックスがある。エリア51の偵察機プログラムにかかる費用は、U-2が1988年に、そしてA-12オックスカートが2007年に機密解除されるまで、連邦議会や一般には公開されていない闇予算から捻出されていた。また、機密解除された文書上では、「エリア51」という名称は編集されているか、削除されている。空軍とCIAの関係者は存在しないはずのエリア51に関してコメントを求められると、決まって「ノーコメント」と回答していた。一方で、エリア25での原子力ロケットプログラムには公的な予算が使われた。空軍、原子力委員会、NASAの関係者は誰ひとり、当地で原子力ロケットが開発されていたことを否定しないだろう。が、ジャッカス・フラッツの裏でほんとうにおこなわれていたことについては、機密扱いとなっている。

p. 406 **核爆弾の設計**…テイラーの同僚であった伝説の人物フリーマン・ダイソンによると、テイラーは「最も小さく、最もエレガント、かつ最も効果的な爆弾をつくった……それも、綿密な計算をすることもなしにね。ただ組みあげただけなのに、テストしてみるとちゃんと機能したんだ」ダイソンは、テイラーと火星行き宇宙船を開発するためにプリンストン高等研究所を辞した。

p. 407 **誰も彼も**…McPhee, *The Curve of Binding Energy*, 170.

コカ・コーラの自動販売機…Ibid., 174.

非常に衝撃的な光景…Ibid.

- p. 408 **オリオンを建造した者**…Ibid., 184.
宇宙原子力推進事務所…Dewar, *To the End of the Solar System*, xix.
- p. 410 **山の側面**…T・D・バーンズに取材。写真参照。ネヴァダ核実験場の公式地図上では、エリア25にあるこれらの山岳はキャリコ・ヒルズと呼称されている。
- p. 411 **コンクリートのトンネル**…“Corrective Investigation Plan For Corrective Action Unit 165: Areas 25 and 26 Dry Well and Washdown Areas, Nevada Test Site, Nevada.” DOE/NV-788, Environmental Restoration Division, National Nuclear Security Administration, January 2002, 12.
五四〇〇万キロから四億キロ…NASAによると、「地球・火星間の距離はお互いの軌道上の位置関係に依存し、最短で5450万キロ、最長で4億130万キロとなる。
遠隔操作の機関車…DOE/NV #1150, “Last Stop for the Jackass & Western.”
- p. 412 **一〇〇分の一の量**…Ibid., 287.
- p. 413 **ソ連のスパイ衛星**…Dewar, *To the End of the Solar System*, appendix F. 「ソ連もジャッカス・フラッツにあるような実験施設をつくった」とデュワーは記している。
二三〇〇ケルヴィン…Finger and Robbins, “An Historical Perspective, 7.
情報を公開した…リー・デイヴィッドソンに取材。Davidson’s original 1990s story is from the *Deseret News*. デヴィッドソンは28年間、記者として〈デザート・ニュース〉紙ワシントン支局に勤め、原子力委員会がユタ州ダグウェイ実験場でおこなっていた極秘の放射線実験に関する記事を数多く書いている。彼は原子力委員会について、こう語っている。「彼らは金には困っていない。ここユタ州で、メルトダウンがどのようなものなのか、さまざまな角度から確かめようとしている。原子力委員会がユタ州にばらまいた放射能の量は、スリーマイル島の事故で飛散した量を上回っている」
- p. 414 **ロスアラモス国立研究所が欲しがっていた**…Dewar, *To the End of the Solar System*, 280.
最悪の事故に関するデータ…Ibid. デュワーによると、原子炉を爆発させるアイデアを考案したのはロスアラモス国立研究所である。とはいえ、ロスアラモスは実際には原子力委員会からの指示で動いていたので、結局のところ、安全テストと称して原子炉を爆発させることに両者が合意したことになる。「爆発で解放される総エネルギー量、放射能の飛散量、拡散パターンを知ることが重要だった」とデュワーは記している。
四〇〇〇度…Ibid., 281.
燃料…Ibid., 282.
- p. 415 **サンプルを採取**…Ibid., 281.
ロサンゼルス上空…Ibid., 280.
正確なデータ…Ibid., 285.
試験のことは覚えていない…ハロルド・フィンガーに取材。
ポイボス…Barth, Delbert, Final Report of the Off-Site Surveillance for the Phoebe 1-A Experiment, SWRHL-19r, January 17, 1966. 集められたデータを見るかぎり、敷地外の住民にとって、放射能レベルは原子力委員会の定めた安全基準量を上回ってはいない。
液体水素がなくなり…Dewar, *To the End of the Solar System*, 29.
- p. 416 **ハズマツ防護服を着た作業員**…“Decontamination of Test Cell ‘C at the Nuclear Rocket Development Station After a Reactor Accident,” January 18, 1967, LA-3633; Dewar, *To the End of the Solar System*, 129–31.
金属製の長いトング…作業者たちは放射性物質を1ガロンの塗料缶に回収した。これ

らの塗料缶は鉛製のトレーラーに載せられ、エリア25から運び出された。

- p. 417 **正式に終了**…Dewar, *To the End of the Solar System*, 203.

そうした最終試験…ダーウィン・モーガンに取材。

ふたつの原子炉…Rollins, “Nevada Test Site- Site Description,” 25 of 99.

- p. 418 **ミルトン・クラインであれば**…ハロルド・フィンガー、ミルトン・クラインに取材。
クラインは以下のようにも語った。「私は“メルトダウン”と呼ぶのには反対だ。なぜなら、メルトダウンは冷却材の喪失によって引き起こされるわけではないからだ」
放射性物質が検出され…Table 3-2, “Corrective Investigation Plan For Corrective Action Unit 165: Areas 25 and 26 Dry Well and Washdown Areas, Nevada Test Site, Nevada,” 32.

土壌深くまで…Ibid. バーンズを目撃証言もこれを示唆している。「原子炉を稼働させる際、キャリコ・ヒルズの周辺約64キロ内のエリアから人を退去させなきゃならなかった。それだけの放射線が放出されたんだ。冷却効果があるから、そのエリア全域を毎回水浸しにしていた。こうして一時的に貯められた池は、深さ数十センチにもなったよ」

新しい目的…T・D・バーンズに取材。

- p. 419 **博士号ものの経験**…この映像フィルムはラスヴェガスの核実験博物館で流されているが、同じ場所に1枚の写真が飾られていた。エリア25の砂漠に「EG&G訓練所295-6820」と書かれた青い看板が立っている風景の写真だ。これはEG&Gが大量破壊兵器訓練における政府のパートナーであったことを示唆しているが、モーガンはEG&Gが政府とそのようなパートナー関係にあったことはないと否定、実験場での公式請負い者としての活動も1990年代にはやめていると回答した。博物館の写真はすでに撤去されているが、2010年12月30日現在、上記の電話番号はまだ使用されている。この番号に（市外局番をつけて）かけると、「こちらは〇〇（名称は変更されている）の訓練部です。メッセージを残していただければ折り返しご連絡いたします」という自動音声で再生される。

メルトダウンが起きる…原子炉の原理、動力用原始炉とロケット用原子炉のちがい、あるいは原子爆弾とのちがいについては、以下を参照。Dewar, *To the End of the Solar System*, xvii.

原子力産業が好況だった年…Rogovin, *Three Mile Island Report*, 182-83.

原子炉ユニット…Ibid., 182.

- p. 420 **最良の保険**…Rogovin, *Three Mile Island Report*, 5.

カナダに墜落…Gates, Mahlon, *Operation Morning Light, Northwest Territories, Canada 1978, A Non-Technical Summary of U.S. Participation*; “The Soviet Space Nuclear Power Program,” Directorate of Intelligence, CIA.

- p. 421 **一般には情報を公開しない**…Weiss, “The Life and Death of Cosmos 954.” Marked Secret, Not to be Released to Foreign Nationals, 7 pages, no date. Declassified 10/24/97.

真っ暗闇のなかで野球をする… Ibid., 2.

緊張の糸が張りつめていた…リチャード・ミンガスに取材。

NEST…Secret, United States Atomic Energy

Commission, No. 234505, Responsibility for Search and Rescue Operations, to M. E. Gates, Manager, Nevada Operations. November 19, 197. 以下も参照。Gates, “Nuclear Emergency Search Team, 2, www.nci.org. Gates, “Nuclear Emergency Search Team,” 2.

宇宙時代の困難…An Ugly Death,” *Time* magazine, February 6, 1978.

- p. 422 **〈宇宙戦争〉のようなパニック**…リチャード・ミンガスに取材。
パン屋の車のように…トロイ・ウェイドに取材。
トロイ・ウェイド…*Operation Morning Light* の著者であり、核緊急捜査隊を組織したマーロン・ゲイツは、プロジェクトの政府代表高官であり、エネルギー省がネヴァダ核実験場でおこなっていた活動の責任者でもあったが、実際に地上軍の作戦行動に参加することはなかった。
上空からは…Weiss, “The Life and Death of Cosmos 954,” 3.
- p. 423 **アメリカ東海岸のどこか**…〈タイム〉誌の記事による。衛星は先週、大量の放射能を飛散させながらカナダ僻地の荒地上空に突入した。アメリカの宇宙科学者は「墜落中の衛星が1回でもプログラムの処理に失敗していたら、早朝ラッシュ時のニューヨーク付近に墜落していただろう」と語った。

第19章 月面着陸捏造説と、エリア51にまつわるその他の伝説

バズ・オルドリン、スレーター大佐、アーニー・ウィリアムズ、リチャード・ミンガス、マイケル・シュラット、ビル・アーヴァイン、ジェームズ・オバーグに取材。

- p. 424 **一九六九年七月二〇日**…アポロ11号の詳細については以下を参照。“Humankind’s first steps on the lunar surface,” <http://nasa.gov> 初の月面着陸の記録については以下を参照。“Apollo 11 Lunar Surface Journal,” by Eric M. Jones, <http://history.nasa.gov/alsj/a11/a11.landing.html>.
数百時間に及ぶ…Jenkins, *Hypersonics before the Shuttle*, appendix 9.
- p. 425 **ネヴァダ核実験場を訪れていた**…Early Training, Field Training Schedule for the first 3 Groups of Astronauts (29), 3, Feb 17-18 & 24-25, 1965 & March 3-4, 1965.
「ここを訪問したことで、地下の核爆発によって生じたクレーターや噴出物がどんなものか確認することができた」以下を参照。USGS Open-File Report 2005-1190, Table 1, “Geologic field-training of NASA Astronauts between January 1963 and November 1972.”
ガイドを務めた…アーニー・ウィリアムズに取材。
最初の井戸…T・D・バーンズ、スレーター大佐、アーニー・ウィリアムズに取材。
月面車を持ち込んで…Gerald G. Schaber, “A Chronology of Activities from Conception through the End of Project Apollo (1960-1973),” U.S. Geological Survey, Branch of Astrogeology.
- p. 427 **地下爆弾実験の副産物**…“The Containment of Underground Nuclear Explosions,” #69043 Congress of the United States, Office of Technology Assessment, 32.
二度出てくる…DOE/NV 772 REV 1, “Apollo Astronauts Train at the Nevada Test Site,” 2. この音声は以下のサイトでダウンロードできる。
http://www.jsc.nasa.gov/history/mission_trans/apollo17.htm.
- p. 428 **楽しいひととき**…アーニー・ウィリアムズに取材。
ちょうど二カ月後…ジェームズ・オバーグ本人へのインタビューと、彼の著書 *UFOs and Outer Space Mysteries* より。オバーグは航空宇宙の歴史に詳しく、月面着陸捏造説や月面にUFOが存在するという陰謀説に対して積極的に反論している。NASAの請負い業者にロケット科学者として雇われ、ヒューストンの宇宙管制センターで働いていたこともある。

月はUFOの基地だった…ジェームズ・オバーグに取材。

- p. 429 **一九七八年のインタビュー…**Matthew Alford, “Steven Spielberg, *Cinema Papers*, 1978.

三つの疑問…月面着陸捏造説を否定している有名なウェブサイトによると、三つの疑問への反論は以下の通り。①風がない月面でアメリカ国旗がはためいているのはなぜなのか？ →ポールをねじ込んだ際の反動で動いているから。②月で撮られた写真に星が写っていないのはなぜなのか？ →NASAが公開したアポロ計画の写真で、星が写っているものは数多くある。③アポロ着陸船の噴射でクレーターができなかったのはなぜなのか？ →月の表面は岩のように固い物質でできているから。以下のサイトを参照。 <http://www.braeunig.us/space/hoax.htm>.

- p. 430 **本物ではないという感覚…**Fox Television broadcast, “Conspiracy Theory: Did We Land on the Moon?” February 15, 2001.

トゥデイ…〈トゥデイ〉のケイティー・コーリックがおこなったケーシングへのインタビュー（2001年8月8日にNBCで放送）を書き起こしたものは、インターネットサイト Global Security で読むことができる。

計画はやむなく中止…Dr. David Whitehouse, “NASA Pulls Moon Hoax Book,” BBC News, November 8, 2002.

- p. 431 **洗脳実験計画…**Marks, *The Search for the “Manchurian Candidate,”* 211. 議会による1977年の聴取のなかで、CIA長官スタンフィールド・ターナーは11年に及ぶ洗脳実験（MKウルトラ計画）について以下のように語っている。「このプログラムでは、44の大学、15の研究施設や民間企業、12の病院やクリニック、3の刑務所など、計80の団体に業務を外注した」

五万八三九三人もの死者…The National Archives, Statistical information about casualties of the Vietnam War, ARC ID: 306742.

月にまつわる一大ほら話…Goodman, *The Sun and the Moon*, 12.

- p. 432 **月に着陸した二番目の男…**この一節の記述は、著者によるバズ・オールドリンへのインタビューと、彼の著作に基づいている。(Chapter 20 in his book *Magnificent Desolation*, which addresses the event and is called “A Blow Heard Around the World,” 332-46 (galley copy).

- p. 434 **二五パーセントの人々…**Brandon Griggs, “Could Moon Landings Have Been Faked? Some Still Think So, CNN, July 17, 2009. グリッグスは「この週に、Googleで“アポロ 月面着陸 陰謀説”と検索したところ、15億件以上の検索結果が表示された」としている。

原子力ドリルで…マイケル・シュラットに取材。

- p. 435 **Nトンネル、Pトンネル、Tトンネル…**U. S. Congress, Office of Technology Assessment, *The Containment of Underground Nuclear Explosions*.

使用されていない…Michael R. Williams, “Ground Test Facility for Propulsion and Power Modes of Nuclear Engine Operation,” 4.

グリーンブライアー掩蔽壕…Ted Gup, “The Ultimate Congressional Hideaway,” *Washington Post*, May 31, 1992.

- p. 436 **存在を知られないようにする…**KCET American Experience, “Race for the Superbomb,” グリーンブライアー掩蔽壕の元最高責任者ポール・ビューガスに取材。

平均一年…U. S. Congress, Office of Technology Assessment, *The Containment of Underground Nuclear Explosions*, 18.

少なくとも六七発…U. S. Department of Energy, *United States Nuclear Tests, July 1945 through September 1992*, 15.

- p. 437 **パイルドライバー実験**…Cherry and Rabb, “Piledriver Drilling,” UCRL-ID-126150, August 9, 1967.
いかに破壊するか…Operation Hardtack II, Defense Nuclear Agency, 3 December 1982. 2009年10月7日、著者がネヴァダ核実験場を訪れた際に複数のエネルギー省職員から聴取。
- p. 438 **核爆弾の警備**…リチャード・ミンガスに取材。
条約調印後…U.S. Congress, Office of Technology Assessment, *The Containment of Underground Nuclear Explosions*, 21.
- p. 439 **四度も名称を変えて**…国家核安全保障庁のタイムラインを参照。
<http://www.nnsa.energy.gov/aboutus/ourhistory/timeline>. 名称を4回変えた機関としては、ほかにも国軍特殊武器計画 (AFSWP) があり、この機関は原子力委員会同様、マンハッタン計画として設立され、1959年5月6日に防衛原子力支援局 (DASA) と改名。1971年7月1日には防衛原子力局と改称され、1996年6月26日に防衛特殊武器局となった。Schwartz, *Atomic Audit*, 61.
- p. 440 **連邦機関の理念**…GoogleでDOE.govと検索すると、小見出しにこのフレーズが表示される。もしくは以下を参照のこと。<http://www.energy.gov/>.
一九〇八年の設立…以下を参照。Federal Bureau of Investigation Official Website, Timeline of FBI History, 1900–1909.
ユーリ・イワノヴィッチ・ノセンコ…Edward Jay Epstein and Susana Duncan, “The War of the Moles,” *New York*, 28–37.
- p. 441 **議論が分かれている**…Walter Pincus, “Yuri I. Nosenko, KGB Agent Who Defected to the U.S.,” *Washington Post*, August 27, 2008. 数十年後に公開されたCIAの文書によると、ノセンコはCIAの手荒な扱いを赦す旨の発言をしたとされている。「3年のあいだ監禁されていたことは遺憾に思うが、恨みには思っていないし、そうってしまったことにも理解を示す」彼が亡くなった直後、CIAは長官のマイケル・ヘイデンから弔いのアメリカ国旗を贈った。
一九九五年五月一日付けの覚書…Memorandum to Members of the Advisory Committee on Human Radiation Experiments, from Advisory Committee Staff, May 1, 1995, “Official Classification Policy to Cover Up Embarrassment.” クリントンの諮問委員会の覚書には「下書き、討議目的でのみ使用すること」と書かれ、1947年の覚書の内容が記載されている。
あらゆる文書、通信…“Report of Meeting of Classification Board During Week of September 8, 1947,” Atomic Energy Commission.
かなりの懸念をもたらすであろう…September 28, 1947, memorandum from J. C. Franklin, manager Oak Ridge Operations to Carroll L. Wilson, General Manager Re: Medical Policy, 2–3; located circa 1995 by Clinton staff.
人体への投与実験に関する医療論文…Ibid.
文章の訂正、削除…October 8, 1947, Memorandum to Advisory Board on Medical and Biology Re: Medical Policy, 8; located circa 1995 by Clinton staff.
- p. 442 **約一九・六億人**…According to Miniwatts Marketing Group.
無知を認めない…AboveTopSecret のCEO ビル・アーヴァインに取材。
新世界秩序…Wikipediaには新世界秩序に関する興味深い概要が、参考文献つきで記載されている。

第20章 空軍の支配——カメラ室から爆弾倉まで——

リチャード・ミンガス、エドワード・ロヴィック、ボブ・マーフィ、T・D・バーンズ、ジョン・ポティート、ピーター・メルリン、ハリー・マーティン、ミリー・マイアディアク、バッド・ウィーロン博士、ジョー・ベンに取材。

- p. 444 **最もセンセーショナルな出来事のひとつ**…リチャード・ミンガス、ジョー・ベンに取材。

ヘリコプターによる攻撃演習…この攻撃演習の詳細は今も機密扱いとなっている。ネヴァダ核実験場オフィスに勤務する国家核安全保障庁のスポークスマンのダーウィン・モーガンは、この出来事についてノーコメントを通してしている。ミンガスとベンはこの攻撃演習について間接的にしか聞いていなかったため、私のインタビューでこの件について語ることができた。核爆弾を穴に下ろす任務についていたふたりは、この危機一髪の状態の内情に通じてはいたものの、攻撃演習について正式な説明は受けていなかった。

- p. 445 **五人のセキュリティ対策チーム**…リチャード・ミンガスに取材。これはこの秘密基地の希少な警備情報である。この警備方法は、現在は採用されなくなっているため、ミンガスが明かしてくれた。

- p. 448 **ジョー・ベンと**…ジョー・ベンに取材。

- p. 449 **先見性というものが**…リチャード・ミンガス、ジョー・ベンに取材。

- p. 451 **コンピューターの計算結果を利用して**…エドワード・ロヴィックに取材。

- p. 452 **科学エンジニアリングの責任者**…ボブ・マーフィに取材。

ボールベアリングくらいのサイズ…エドワード・ロヴィックに取材。具体的にいうと「15GHz（ギガヘルツ）のレーダー、0.08の波長で観測した場合」

- p. 453 **グルーム湖には**…バーンズは、爆弾のいくつかはエリア51のこの乾燥した湖底の近くに投下されたと指摘している。

- p. 454 **人目につかない区画**…Johnson, “Tonopah Test Range Outpost of Sandia National Laboratories,” Sandia Report SAND96-0375 UC-700 March 1996, U.S. DOE Contract DE-AC04-94AL85000.

西のシカゴ…State Historic Preservation Office, Beatty, Center of the Gold Railroads, “Chicago of the West, Nevada Historical Marker 173.

秘密のテストを安全に確実にこなえる…Johnson, “Tonopah Test Range Outpost of Sandia National Laboratories,” 8.

タルススの聖パウロ…Ibid., 9.

- p. 455 **ローラー・コースター作戦**…Ibid., 47; Operation Roller Coaster Sites, TTR SAFER Plan, Section 2.0. Map page 7; NV0-171 Environmental Plutonium on the Nevada Test Site and Environs, June 1977, 35.

F - 117 ナイトホークのサポート施設…ピーター・メルリンに取材。

髪とひげを伸ばす…リチャード・ミンガスに取材。

F - 117 のテスト飛行…Crickmore, *Lockheed F-117 Nighthawk*, 4. 同年10月、アル・ホイットリー少佐が実戦パイロットとしてナイトホークに初搭乗した。

- p. 456 **ロバート・M・ボンド中将**…U.S. Air Force Official Web site, biography.

ジェームズ・“ジミー”・ドゥーリトル大將…ハリー・マーティンに取材。

- p. 457 **異論もあった**…この時、バーンズはすでにエリア51を離れていたため、これは彼が間接的に聞いた話である。ミグ計画に最初から関与していたバーンズはボンド中将に関する情報を内々には知っていたが、正式な説明は受けていない。

最後のことば…Transcript reads…10:17:50 a.m. 録音テープの記録は以下の通りである。午前10時17分50秒、ボンド「どれくらいで旋回すればいい？」午前10時17分53秒、管制塔「右20度へ、今、旋回せよ」ボンドが2回クリックして応答。午前10時18分02秒、ボンド「制御不能。制御……」午前10時18分23秒、ボンド「脱出しなければ。制御不能だ」

- p. 458 **フレッド・ホフマン**…Hoffman, “Allies Help Pentagon Obtain Soviet Arms,” Associated Press, May 7, 1984.

エリア51とエリア52 の上空では…Johnson, “Tonopah Test Range Outpost of Sandia National Laboratories,” 79. ハヴ・ブルーの初フライトは1977年12月1日午後7時にビル・パークによっておこなわれた。

- p. 459 **アクウィライン**…ハンク・マイアディアクの私文書。ジム・フリードマン、ミリー・マイアディアクに取材。世界でひとつしか知られていないこの無人機の模型が、ミリーの自宅のバーに飾ってあった。

そもそもの目的…ジーン・ポティートに取材。

エクランプラン…James May, “Riding the Caspian Sea Monster,” *BBC News* magazine, September 27, 2008.

ジム・フリードマン…ジム・フリードマンに取材。

- p. 460 **九九〇〇万ドル上まわる**…ハンク・マイアディアクの私文書。

プロジェクト・オーニソプター…Richelson, *Wizards of Langley*, 148.

プロジェクト・インセクトソプター…ヴァージニア州ラングレーのCIA本部にあるCIA博物館で著者が見たもの。

アコースティック・キティ…Richelson, *Wizards of Langley*, 147.

- p. 461 **センサー無人機**…バッド・ウィーロン博士に取材。

- p. 462 **U-2のパイロットが投入され**…トニー・ベヴァクアに取材。スレーター大佐へのインタビューによると、これらの危険な任務のいくつかには「黒猫中隊」のパイロットたちも投入された。

CIAの評判は地に堕ち…この時期、CIAが世間からどう見られていたかは、以下を参照。Marks, *Search for the Manchurian Candidate*, ” 220. Marks’ s entire chapter 12,

細菌兵器の研究…CIA Top Secret, Biological Warfare, USSR: Additional Rumors of an Accident at the Biological Warfare Institute in Sverdlovsk Dated October 15, 1979 Declassified 6/10/96.

- p. 463 **ヘルファイア**…ヘルファイアの製造元はロッキード社。ヘルファイア (Hellfire) は、helicopter-launched, fire-and-forget (ヘリコプター発射型自動照準ミサイル) の頭字語である。

オサマ・ビン・ラディンという男…Coll, *Ghost Wars*, 533. 「プレデターがカンダハル郊外のタルナック・ファーム上空をホヴァリング中にビン・ラディンらしき男の姿を撮影した」 *Ghost Wars* Steve Coll (スティーヴ・コール『アフガン諜報戦争—CIAの見えざる戦い ソ連侵攻から9.11前夜まで』白水社/坂井 定雄、伊藤 力司、木村 一浩訳)

第21章 驚くべき真実

T・D・バーンズ、レグホーン大佐、ハーヴィ・ストックマン、ジェラルド・ボズナー、ステイーヴン・ヤンガー、ジョン・パイク、ジーン・ポティート、EG&Gのエンジニア、デヴィッド・マイラに取材。

p. 464 **エンジニアと空力技師は**…T・D・バーンズに取材。この部分はバーンズのインタビューに基づいているが、バーンズは無人機プロジェクトに従事していなかったため、これは彼の知識に基づいた推測である。コールも自著でこのことについて触れている。

p. 465 **法律で禁じられて**…December 4, 1981, President Ronald Reagan Executive Order 12333.

暗殺を許可…Coll, *Ghost Wars*, 539.

CIAと空軍はチームを組んで…Ibid., 534. 「空軍はアフガニスタンでの作戦の借りを返すべきだ、とCIAは考えた。なにしろ、ペンタゴンがネヴァダ州で半年間テストしても学べなかった無人機の能力をたったひと月足らずで学んだのだから。ビン・ラディンがタルナックのモスクへと歩いていく画像を見て以来、ブラックは無人機へのミサイル搭載を熱心に唱えるようになっていた」 *Ghost Wars*, Steve Coll (スティーヴ・コール『アフガン諜報戦争—CIAの見えざる戦い ソ連侵攻から9.11前夜まで』白水社/坂井 定雄、伊藤 力司、木村 一浩訳)

ジョージ・テネット…Coll, *Ghost Wars*, 535. (スティーヴ・コール『アフガン諜報戦争—CIAの見えざる戦い ソ連侵攻から9.11前夜まで』白水社/坂井 定雄、伊藤 力司、木村 一浩訳) 「子供用ブランコがひとつあった。タルナックには多くの家族が住んでいた。CIAの推測では、屋敷には約100人の女性と子供たち——ビン・ラディンの家族と側近たちの家族——がいた」 テネットが最終的な決断をしたのだろう。

p. 466 **NATO軍に情報を提供**…Jim Garamone, “Predator Demonstrates Worth Over Kosovo,” American Forces Press Service, September 21, 1999.

無人偵察機の初任務…*9/11 Commission Report*, 213-214.

p. 467 **大成功の戦術行動**…Wolfowitz’ s interview with CNN anchor Maria Ressa appeared in print as “U.S. Missile Strike Kills al Qaeda Chief,” CNN, November 5, 2002. ウォルフオウィッツは「毎回あのように成功すれば、危険人物を排除できるだけでなく、テロリストのほうも戦術や作戦、やり方を変えざるをえなくなるだろう」と付け加えた。

クリスチャン・サイエンス・モニター…Philip Smucker, “The Intrigue Behind the Drone Strikes: Yemeni Official Says US Lacks Discretion as Antiterror Partner,” *Christian Science Monitor*, November 12, 2002.

アラビア語が堪能で…Ibid.; Seymour Hersh, “Manhunt: The Bush Administration’ s New Strategy in the War Against Terrorism,” *New Yorker*, December 23, 2002.

p. 468 **モハメド・アテフがプレデターに殺害**…Peter Bergen and Katherine Tiedemann, “The Drone War: Are Predators Our Best Weapon or Worst Enemy,” *New Republic*, June 3, 2009.

CIAが陣頭指揮を執った…Mark Hosenball and Evan Thomas, “The Opening Shot,” *Newsweek*, November 18, 2002.

p. 469 **新たな使い道**…MQ-1B Predator, Official Web site of U.S. Air Force, fact sheet.

ゼネラル・アトミックス社…General Atomics Aeronautical, <http://www.ga-asi.com/> accessed December 30, 2010.

リーパーとプレデターの大きなちがい…Travis Edwards, “First MQ-9 Reaper Makes

- Its Home on Nevada Flightline,” *U.S. Air Force Public Affairs*, March 14, 2007.
- p. 470 **フランク・ゴラン准将**…Major John Hutcheson, “Balad Predator Strikes Insurgents Placing Roadside Bomb Near Balad,” *Red Tail Flyer*, 332nd Air Expeditionary Wing, Public Affairs, Balad Air Base, Iraq March 31, 2006, 5.
- 数分以内に**…Ibid.
- p. 471 **二〇〇九年には**…[http:// www. longwarjournal. org/pakistan-strikes. php](http://www.longwarjournal.org/pakistan-strikes.php) この数字についてはさまざまな説があり、確実な数字ではない。無人機攻撃の権威はピーター・ベルゲンとキャサリン・タイデマンとされている。ふたりは無人機攻撃の記録をつけて、ニュー・アメリカ・ファウンデーションや雑誌〈ニュー・リパブリック〉などに分析を提供している。
- 氷山の一角にすぎない**…これは、多くのミサイルがCIAによって発射されているが、CIAの無人機攻撃は公にされていないためである。私がインタビューしたペンタゴン高官たちはノーコメントを通し、国務省高官もCIAの無人機攻撃に関するコメントを拒否しているため、無人機作戦におけるCIAの役割について確認することはできない。2009年12月、パキスタン訪問中のヒラリー・クリントン国務長官は無人機攻撃を調査していた記者団に「特定の戦略または技術についてコメントはしない」と語っている。実際には、1955年のビッセルとルメイ将軍時代に遡るCIAと空軍の戦略的協調関係は再開されている。
- カンダハルの野獣**…匿名のロッキード社員に取材。Originally reported by *Air & Cosmos* magazine, [http://www. air-cosmos. com/site/](http://www.air-cosmos.com/site/), the story was quickly picked up in the U. S. press. David Hambling, “Mysteries Surround Afghanistan’s Stealth Drone, *Wired* magazine, Danger Room Blog, December 4, 2009.
- p. 472 **国防総省は**…空軍長官に取材。Public Affairs Engagements Office.
- 合成開口レーダー**…Sandia National Laboratories: Synthetic Aperture Radar: What is Synthetic Aperture Radar? Sandia Synthetic Aperture Radar Programs (Unclassified programs and participants); [http://www. sandia. gov/](http://www.sandia.gov/).
- インディアン・スプリングス**…2009年10月9日、著者はネヴァダ州クリーチ空軍基地、インディアン・スプリングスを実際に訪れた。
- p. 474 **厄介な問題**…“Report of the Defense Science Board, 2008 Summer Study on Capability Surprise, Volume II: Supporting Papers, January 2010. Office of the Under Secretary of Defense For Acquisition, Technology, and Logistics, Washington, DC, 20301-3140, chapter 2, Appendix 2-A, Wicked Problems, 127-31.
- p. 475 **仕事を始めると、仕事そのものが変わってしまう**…Ibid., 127.
- 自らの兵器で撃ち落とした**…Carl Hoffman, “China’s Space Threat: How Missiles Could Target U. S. Satellites,” *Popular Mechanics*, July 2007.
- p. 476 **公の説明**…Jim Garamone, “Navy to Shoot Down Malfunctioning Satellite,” American Forces Press Service, February 14, 2008; “Navy Says Missile Smashed Wayward Satellite, MSNBC. com News Services, February 21, 2008; “U. S. Missile Shoots Down Satellite- But Why?” *Christian Science Monitor*, February 22, 2008.
- 議会に真実を告げる必要がなかった**…Killian, *Sputnik, Scientists and Eisenhower*, 25.
- p. 477 **人工衛星から爆弾を投下するのは容易ではない**…Ibid., 287. 1958年3月26日付政府広報に掲載されたキリアンのレポート。「衛星爆撃機、月面軍事基地などの話題があげられて、しばしば宇宙が未来の戦場のようになっているが……こうした構想の大部分は目的を果たす方法としては手際が悪く、効果がないように見える。例えば、爆弾

発射機能を持つ衛星だ。人工衛星から爆弾を投下するのは容易ではない」

科学者ではなかった…2010年3月にこの件を調べてくれたMITの記録保管人によると、ジェームズ・キリアンは経営学の学士号しか保有していなかった。

米国宇宙監視ネットワーク…NASA Orbital Debris Program Office, Frequently Asked Questions, July 2009, <http://orbitaldebris.jsc.nasa.gov/faqs.html>.

- p. 478 **一センチの破片を追跡**…Carl Hoffman, “China’s Space Threat: How Missiles Could Target U.S. Satellites,” Popular Mechanics, July 2007.

宇宙に打ち上げられたスパイ衛星…レグホーン大佐に取材。

- p. 479 **〈アイテック・コーポレーション〉を設立**…情報 (information の I) テクノロジー (technology の tek) を意味するアイテック (Itek) は、1957年に投資家のローレンス・ロックフェラーの元手によって設立された。同社は、コロナ計画の開始から同計画が1972年に終了するまでコロナ用のカメラを作っていた。レグホーン大佐とバッド・ウィーロン博士へのインタビューによると、それ以後のCIA/国家偵察局のシステムはパーキンエルマー社に外注されたという。ヘルムズは回顧録に「コロナは145の極秘任務を遂行し、そのすべてにおいて有益な成果をもたらした」と書いている。

数十年携わった…U.S. Air Force Official Web site, Biography of Colonel Richard Sully Leghorn, Retired, Air Force Space Command, <http://www.afspc.af.mil/library/biographies/bio.asp?id=9942>.

W61アース・ペネトレーター…Leland Johnson, “Sandia Report: Tonopah Test Range Outpost of Sandia National Laboratories, SAND96-0375, UC. 700,” March 1996, 80.

地中貫通型爆弾…Nelson, “Low-Yield Earth-Penetrating Nuclear Weapons,” 3, figure 3.

七、八カ国のうち五カ国…Comprehensive Nuclear-Test-Ban Treaty Organization (<http://www.ctbto.org/>). 1996年9月26日、ニューヨークにてアメリカ、中国、フランス、イギリスおよびロシアが包括的核実験禁止条約に調印した。核武装国で調印しなかった(2011年現在も調印していない)のは、インド、イスラエルおよびパキスタンである。包括的核実験禁止条約機関によると、イスラエルは核実験を報告していないものの、核武装国と考えられている。2006年、韓国も核実験をおこなったことを発表した。私も言及している1963年の部分的核実験禁止条約では大気圏、宇宙空間、水面下での核爆破を禁止しているが、地下核実験は認めている。1996年の包括的核実験禁止条約では、地下を含むあらゆる場所での核実験を禁止している。

- p. 480 **神の投げ下ろす棒**…Eric Adams, “Rods from God,” Popular Science, June 1, 2004. **排除できる威力がある**…T・D・バーンズに取材。

ロング・ロッド・ペネトレーション…Nelson, “Low-Yield Earth-Penetrating Nuclear Weapons,” 4.

一九九九年四月の報告書…JSR. 97.155, “Characterization of Underground Facilities.” JASON, MITRE Corporation, McLean, Virginia.

- p. 481 **反論する**…スティーヴン・M・ヤンガーに取材。

ネヴァダ核実験場での作戦…“NSTec Contracted to Operate NNSA Test Site,” United Press International, December 22, 2008. スティーヴン・M・ヤンガーに取材。

上院から削除される…CRS Report for Congress, “Bunker Busters”: Robust Nuclear Earth Penetrator Issues, FY2005-FY2007; Domenici: RNEP Funds Dropped from Appropriations Bill,” 公聴会記録。テリー・エヴェレット下院議員「この強化型地中貫通核兵器の軍事的必要性があるのかどうか率直に言っていただけますか？」ド

ナルド・ラムズフェルド国防長官「難しい質問ですね。なぜなら、彼らは時々“軍事的要求”という言い方もするので。それが正式なプロセスなのです。無人機が開発されるまでは無人機の軍事的要求なんてものはありませんでしたから」

ロケット飛翔体応用原子力エンジン計画…Michael R. Williams, “Ground Test Facility for Propulsion and Power Modes of Nuclear Engine Operation, Savannah River National Laboratory, Department of Energy, WSRC. MS. 2004-00842.

- p. 483 **約六億ページ**…Pauline Jelinek, “U.S. Releases Nazi Papers, Associated Press, November 2, 1999.

エリア51に関する多くの書類…EG&Gのエンジニアに取材。

ロズウェル墜落事故の残骸…このためにCIAと空軍はロズウェル墜落事故の残骸の在り処を自分たちの記録から見つけることができなかった。

- p. 485 **防衛関連請負い業者〈EG&G〉**…2010年7月16日、EG&G/URSのPR会社サード・バービネンのミーガン・スタフォードへのインタビュー。1999年、EG&Gはカーライル・グループに買収された。その後、2002年にURSに買収された。2000年、EG&Gはレイセオン社とのジョイント・ベンチャーの〈JT3〉（ジョイント・テスト・タクティクス・アンド・トレーニング有限責任会社）を設立し、「ネリス試験訓練場、空軍飛行試験センター、ユタ州の試験訓練場および電子戦闘訓練場への工学および技術サポート」をおこなっている。

- p. 486 **ヴァネヴァー・ブッシュ**…Vannevar Bush papers located at National Security Archives, Truman Library, the Roosevelt Library, and MIT Archives; Zachary, Endless Frontier, Library of Congress, “Vannevar Bush, a Collection of His Papers in the Library of Congress,” Manuscript Division, Library of Congress, Washington, DC.

- p. 487 **ヨーゼフ・メンゲレ医師**…ジェラルド・ポズナーに取材。Posner and Ware, Mengele: The Complete Story, 83.

小児症、双子たち…Koren and Negev, In Our Hearts We Were Giants, 85. 197.

- p. 488 **ヒトラーのために**…Erik Kirschbaum, “Cloning Wakes German Memories of Nazi Master Race,” Reuters, February 27, 1997. アメリカも優生学と無縁ではない。以下を参照。Edwin Black, “Eugenics and the Nazis: The California Connection,” San Francisco Chronicle, November 9, 2003.

ディナ・バビット…Ibid., 103. 31 and photographic inserts. バビットの旧姓（アウシュヴィッツで使われていた姓）はゴットリーブだった。Bruce Weber, “Dina Babbitt, Artist at Auschwitz, Is Dead at 86,” *New York Times*, August 1, 2009.

マルティナ・プジナ…Koren and Negev, In Our Hearts We Were Giants, 109.

一人息子のロルフによると…ジェラルド・ポズナーに取材。ポズナーはロルフ・メンゲレにインタビューし、メンゲレの5000ページにおよぶ文書と彼の戦後の日記を見ることができた。

ファウスト的取引…EG&Gのエンジニアに取材。

ソ連に住むことはなく…ジェラルド・ポズナーに取材。

- p. 492 **アイリーン・ウェルサム**…Eileen Welsome, “The Plutonium Files: America’s Secret Medical Experiments in the Cold War, Albuquerque Tribune, November 1993.

ニュールンベルク綱領…ニュールンベルク綱領（1）被験者の自発的同意が絶対に必要である。（2）実験は、他の研究方法や手段では得られず、かつ理由のない無益な性質のものではなく、社会的善のために実り多い結果をもたらすものでなくてはならない。以下を参照。http://ohsr.od.nih.gov/guidelines/nuremberg.html.

クリントン大統領…この諮問委員会は14人のメンバーで構成され、これらのメン

バーが放射線被爆省庁間作業グループという閣僚レベルのグループを通して大統領に報告を上げた。このグループのメンバーには、国防長官およびエネルギー省（元原子力委員会）長官、司法長官、CIA 長官らがいた。同委員会は、1955 年に調査結果を発表して解散した。現在は、エネルギー省安全衛生保障事務所がウェブサイトを持している。エネルギー省は、「全米に拡散している 320 万立方フィートにおよぶエネルギー省の記録から関連する歴史的文書を特定し、目録を作成すべく集中的に取り組んでいる」と述べている。1 立方フィートあたり約 2000 ページの文書があるにもかかわらず、エネルギー省/安全衛生保障事務所データベースには「EG&G」の文書はわずか 500 しかない。

エピソード

レグホーン大佐、エドワード・ロヴィック、EG&G のエンジニア、デヴィッド・マイラに取材。

- p. 494 **記念アルバム**…政府発行の「1. 52 部隊公式レポート」であり、高校の卒業記念アルバムのような仕様になっている。

二〇億ドル近く…Atomic Audit, 102. クロスロード作戦には 13 億ドル（1996 年頃のドルで）という法外な金額が投入された。これは、後の 1950 年代におこなわれた熱核爆弾実験をはるかに上回るものだった。

- p. 496 **側近たち**…ポツダムでおこなわれた連合国協議の 2 週目となる 1945 年 7 月 24 日夕方、トルーマンは通訳を同伴せずにスターリンに近づき、アメリカが「並外れた破壊力を持つ新型兵器」を持っていることをさりげなく伝えた。スターリンはほとんど興味を示さず、「その兵器を日本に有効に使ってほしい」と答えただけだった。スターリンが落ち着いていた理由は、後に明らかになる。ソ連の諜報機関は 1941 年秋から原子爆弾計画の情報を受け取っていたのだった。以下を参照。Department of Energy Archives (<http://www.cfo.doe.gov/>)

スターリンのブラック・プロパガンダ…EG&G のエンジニアに取材。

トルーマンの矢に対する威嚇射撃…EG&G のエンジニアに取材。この話をした EG&G のエンジニアによると、この情報は EG&G の上司から伝えられたもので、その上司は政府の上官から聞いたという。非道徳的な計画に参加させる手段として EG&G の精鋭エンジニアたちが偽の情報を与えられた可能性も除外できない。1951 年当時の自由主義世界には、ヨシフ・スターリンを超える敵はいなかったからである。ロシアが UFO の保存記録を公開しない限りスターリン側のストーリーを知ることはできないが、ソ連崩壊後、スターリンの UFO への関心が明らかになっている。ジェームズ・ハーフォード教授は自著 *Korolev* で、スターリンがロケット設計チーフのセルゲイ・コロリョフに UFO について詳しく調べるよう求めた、と述べている。2002 年、Pravda.ru が *Stalin's UFO* という記事を掲載し、この独裁者のロズウェル/UFO 調査チームを「数学者ムスチスラフ・ケルディシュ、化学者アレクサンダー・トープチェフ、物理学者セルゲイ・コロリョフ」と特定している。他の UFO 研究家たちは、この UFO チームのメンバーを、ミサイル設計者でありスプートニク発明者であるセルゲイ・コロリョフ、ロシアの原子爆弾の父イーゴリ・クルチャトフ、数学者で理論家、宇宙のパイオニアでもあるムスチスラフ・ケルディシュとしている（写真参照）。

- p. 497 **ヒトラーだった**…ジーン・ポティートに取材。Also from Poteat's participation

in the CIA's Oxcart panel discussion at the National Air and Space Museum, Smithsonian Institution, Steven F. Udvar-Hazy Center, September 24, 2010.

ホルテン兄弟…デヴィッド・マイラに取材。

アメリカの第九軍に…Myhra, The Horten Brothers and Their All Wing Aircraft, 229.

ロンドンのハイド・パークに近い…Ibid., 230.

- p. 498 **セオドア・フォン・カルマン…**National Aviation Hall of Fame, biography, Theodore von Karman. <http://www.nationalaviation.org/von-karman-theodore/>. Myhra, The Horten Brothers and Their All Wing Aircraft, 230.

これらのテープ…National Air and Space Museum, Archives Division, Reimar and Walter Horten Interviews, Accession No. 1999-0065.

- p. 499 **ふたつの制約事項…**デヴィッド・マイラに取材。

二〇一〇年…2010年10月29日付の陸軍省法律顧問室（104 Army Pentagon, Washington DC）ネイサン・ミッチェル法律顧問補佐官からアニー・ジェイコブセン宛ての手紙。

- p. 500 **もうひとり、（重要な）EG&G のエンジニア…**このエンジニアの名前とこの人物が1950年代にEG&Gで雇用されていた事実が、他の元EG&G職員たちによって確認されている。

アスファルトの空き地…国家核安全保障庁ネヴァダ核実験場オフィスが出資したネヴァダ核実験場の記録映画のなかに、この空地はEG&Gの最初のラスヴェガス本部とされている建物に隣接してある。「EG&Gがラスヴェガスに移転した当初、本部は現在コマースと呼ばれている“A”ストリートにあった」

- p. 501 **小さな木製の円盤…**エドワード・ロヴィックに取材。

- p. 502 **宣誓供述書…**“Dead Airman's Affidavit: Roswell Aliens Were Real.” Fox News.com, July 3, 2007. <http://www.foxnews.com/story/0,2933,287643,00.html>, accessed December 30, 2010.

きわめて困難…2010年のボブ・ラザーとの書面によるやりとり。

- p. 504 **極秘の部外秘データ・ファイル…**EG&Gのエンジニアに取材。

ヴァネヴァー・ブッシュ…ヴァネヴァー・ブッシュへの理解を深めるために、私は彼の記録や手紙、記事、本、モノグラフのドラフトを読んだ。Vannevar Bush, “A Collection of His Papers in the Library of Congress, Manuscript Division, Library of Congress, Washington, DC; Vannevar Bush, “Office of Scientific Research and Development,” National Archives and Records Administration, College Park, Maryland; Vannevar Bush Papers, Carnegie Institute, Washington, DC.

人体への影響を調べる人体実験…この実験には、高濃度のレイサイトおよびマスタード・ガスが使われていた。Advisory Committee on Human Radiation Experiments, Final Report, 98; Veterans at Risk: The Health Effects of Mustard Gas and Lewisite, 66. 69.

被験者たち…Ibid., 66.

- p. 505 **ディクソン知的障害者施設…**Advisory Committee on Human Radiation Experiments, Final Report, Chapter Seven, Nontherapeutic Research on Children, 320. 351. Dr. Susan Lederer, Military Medical Ethics, Volume 2, “The Cold War and Beyond: Covert and Deceptive American Medical Experiments,” 514. Lederer, a Clinton committee staff member, cites D. J. Rothman Strangers at the Bedside: A History

of How Law and Bioethics Transformed Medical Decision Making, Basic Books, 1991. 83 letter-number designation of S.1: Gosling, The Manhattan Project: Making the Atomic Bomb, 10.

- p. 506 **J T 3**…2010 年 10 月 18 日にアクセスした同社のウェブサイトでは、次のように述べている。「国防総省は、顧客のテストおよびトレーニングのサポートを合理化するために、西部地域の工学および技術サポートを、ひとつの組織で一括管理するようにしました。これに応じて、URS とレイセオン・テクニカル・サービス・カンパニー (RTSC) はジョイント・レンジ・テクニカル・サービス (J-Tech) の要求をサポートする JT3 有限責任会社を設立しました。私たちは、お客様やその他の契約者のみなさまのテスト・プロジェクトやトレーニングの計画、準備および実行を支援する専門家です」

＜原注訳＞

プロローグ～第3章 田中文訳

第4章～第7章 木下晋也訳

第8章～第12章 越智睦訳

第13章～第16章 藤井美佐子訳

第17章～第19章 武藤陽生訳

第20章～エピローグ 加藤万里子訳